

第二十一章 エンジェルフオール

1

《とびきり面白い活劇ショーの始まりだ》

倉庫代わりの小さな部屋。

萌黄が真佐吉の差し向けた男たちに追われ、隠れる場所はないかと手近なドアを開いた時、ここなら簡単には見つかるまいと当たりをつけ、迷うことなく飛び込んだのだった。

直後に男たちの足音が廊下を駆け抜けていった。萌黄は幾度目かのピンチを脱したことを知ってホツとすると、気が抜けたのか、そばにあった段ボール箱に寄りかかり、倒れるようにして気を失った。

揺り起こしたのが、冒頭の真佐吉の声だった。ひどくうれしげに笑いながら。

段ボールにもたれて床に座っている萌黄のちょうど真向かいの壁、そこに四角い画面が浮かんでいた。ここにも液晶パネルが嵌め込まれていたのだ。

『活劇ショー』として見せられたのは、五十嵐と迷彩服の一騎打ちだった。

《入口ゲートのモニユメントには、独立した監視カメラを仕組んである。おかげでこうして観戦することができたよ。まあゆっくりくつろいで、試合の模様を楽しもうじゃないか》

真佐吉はリアルな五十嵐が勝利するものと確信していたはずだ。じっさい迷彩服側が押す形になっても、そのうち挽回するさと軽口を叩いていた。

そして終盤。五十嵐は狂気に駆られたように、次々と迷彩服たちをサーベルの下に沈めていった時は、拍手する音さえ響かせた。

ところが、である。土壇場で状況は一変した。ふいに画面に得体の知れない白いものが登場すると、五十嵐老人を口らしき部分でガブリとくわえてしまった。萌黄は思わずスピルバーグの恐竜映画を思い出していた。その中で人間がT-R E Xの餌食になったシーンにそっくりだったからだ。

萌黄の肌は粟立った。怪物が登場して、画面はリアリティを失った。時代劇の中にゴジラが乱入したような、いやそれ以上の不可解さ、不自然さがあつて、そのわけの判らなさに萌黄は寒いものを感じたのだ。

五十嵐は白い怪物にさんざんいたぶられたあげく、最後は地面に叩きつけられ、動かなくなった。

怪物は役目を終えたと言わんばかりに、ズズズと巨大

な凶体を引きずりながら、画面の外に消えていった。

「何なん？ コレ」

萌黄の口がひとりでにつぶやいていた。五十嵐が倒された、おそらくは生きていても瀕死の重傷であろうことは容易に想像がつく。だがその悔しさ以上に、最後に現れた正体不明の怪物の所業は、あらゆる意味で萌黄には許せなかった。

「あんな怪物がW I B Aに棲みついていたやなんて——真佐吉さん！ あなたが飼い主なん？ あなたがけしかけたん!」

燃える目で天井を見据える。しかし真佐吉が返事をよこすまで、しばらくの間があった。

《私は知らない。私の知る限りでは、W I B Aにはあのような生物は棲息していない》

「でも、現におったやんか。あなたはこの湖上都市の機能を完全に支配下に置いてたんでしょ？ あなた以外に誰が——」

《何だと思うね、正体は》

唐突に真佐吉は質問してきた。

「何って——琵琶湖の底に昔からおった恐竜ビワゴンとか……。ゲームやなんて言いながら、あんなもの凄い隠れキャラを秘密にしてたんやったら、卑怯やよ」  
ため息の音が聞こえた。

《君はいると思っっているのかね。琵琶湖にそんなUMA  
など》

UMAとは、謎の未確認生物を表す俗語である。

「だって——そしたら——」

萌黄は言葉が続かなくなった。

《もう一度言う。私は、知らない。だいいち、リアルを  
屠<sup>ほふ</sup>ってもメリットがないじゃないか》

その通りである。真佐吉はリアルを生きたまま集める  
必要があるのだ。

沈黙が降りた。萌黄はもつと問い詰めてやろうと前の  
めりになったが、言うべき文句が思いつかなかつた。

《調べてみる——》

言ったきり、真佐吉は会話を断った。真佐吉の気配が  
部屋から消えた。

「ちよつとお……もう！ 無責任な」

萌黄は腹を立てながら、目を画面に戻した。中継はま  
だ継続している。倒れた五十嵐に濃紺のTシャツに青の  
ジーンズをはいた女性が近づいていく。

「むんっ」

その時、まるでシャボン玉が消えるように、壁の上か  
ら映像が消えた。壁はただの壁に戻った。

(……………)

萌黄は中味の詰まった段ボール箱のひとつに腰かけた。

今見たもの、聞いたことを整理したかったのだ。

一方的に映像。あれは本当の出来事だったんだろうか。瞼の裏に五十嵐の血まみれの姿がくつきりと焼き付いていた。そして五十嵐をパクりとくわえた怪物の、のっぺりとした白い皮膚も。そう、怪物の皮膚は恐竜のようなイガイガでもなく、魚のようなウロコでもなく、ひたすらのっぺりしていた。他に表現のしようがなかった。

『私は、知らない』

真佐吉の言い分を鵜呑みに信用することはできない。それにしても「知らない」と言った声はいやに真に迫っていた。演技かも知れないが。

靴音がした。思考は中断された。

『——この部屋はまだ調べてなかったぞ』

ドアのすぐ外で、男の声があった。萌黄はすぐに頭を巡らせて逃げ道を探した。それはドアの真向かいの壁にあった。萌黄は急いでそちらに向かい、ドアをそつと開けた。また別の廊下があった。人影はない。すつと身体を滑らせ、後ろ手にドアを閉める。すぐ左手に下り階段がある。

(また下り……)

ここに至るまで、数度に渡って階段を降りている。表示がないので、いま自分は何階にいるのか判らない。

とにかくここには危ない。萌黄はドアを離れた。

むんはW I B Aの入口ゲートをはいつてすぐにある、第一広場にいた。いたるところにリアルキラーズ隊員の亡骸が転がっている。そのほとんどは既に砂状化が進み、人の形を遺しているものは少なかった。

（ヴァーチャルの世界のほうが、死は美しい——）

身体をねじると、地面に横たわった五十嵐が見える。リアルは死んでも砂になることはない。砂になることはできない。だからこそつらい悲しみが尾を引く。

いま彼の信奉者たちが輪になって囲み、その死を悼んでいる。もちろんむんも悲しかった。むんが駆け寄った時、五十嵐はいまわの際にむんの顔を見上げた。その目は両方とも濁ってはいたが、覆っていた銀色の影は微塵もなかった。

——萌黄さんよ、ひとつ判ったことがある。この世界のことだ。

五十嵐は苦しい息の下で言った。むんを萌黄と思い込んで。

——この世界は悪い科学者が自分の欲望を満たすために作った、忌まわしい世界だと思っておったが、そうではない。宇宙には必要ではないものなど、ひとつとして

存在しないのだ。この世界もしかり。

むんは徐々に小さくなる老人の口許に耳を寄せた。

——私らがリアルに選ばれたのも偶然ではないだろう。きつとそれなりの役割が……。

むんの手を握りながら、五十嵐寛寿郎はうつすらと微笑みを浮かべた顔で息を引き取った。最後に彼の脳裏に浮かんだのは、孫の寛之の元気に走り回る姿だったに違いない。

「むんさん」背後から雛田の声が呼んだ。「先にひとりで行っちゃわないでくださいよ。何が隠れているか、知れたもんじゃありませんから」

「あのシロヘビの親玉のこと？」

「それもありますが、迷彩服の連中だって、奥にはゴロゴロいるって話ですよ」

ここで守備の任についていたリアルキラーズは、半数が五十嵐に倒され、生き残った者も、シロヘビの下敷きになるなどして重軽傷を負って、あとから砂状化し、その姿は土に帰った。無事なのはシュウという副長ほか数えるほどだった。

「中村さんがリアルキラーズの武器を集めています」

「あの人たち、五十嵐さんが亡くなって、どうしはるんやろ」

「それがね」雛田は口の横に手を当てて、「どうやら新

しい教祖様を見つけたようですよ」

教祖？

むんは不審気な表情で崩れたゲートのあいだから棧橋のほうを眺めた。

若者たちが一カ所に固まっているのが見えた。中心にいるのは、炎少年だった。

「まさか、あのコ？」

「そうらしいんだ」雛田は首に人差し指を差し込んでネクタイを緩めると、「彼がリアルであると知ると、五十嵐さんの亡き意志を継げるのは君だけだと、奴ら、目の色を変えてね」

「はー」

「まあ、あのビジュアルだから、多少、神がかり的ではあるけど」

すると、どう話がついたのか、動き出した炎少年の車椅子に付き従うように、若者たちはゾロゾロとこちらに向かつて歩き出した。

むんは首を左右に振り、リアルキラーズの作戦室だった建物に向かった。といっても建物はシロヘビによって破壊され、瓦礫と化していた。むんは残骸にもたれているシュウのそばによると、腰を屈めて話しかけた。

「あなたたちの本隊は、いまどこにいるんですか？」

シュウは擦りむいた顔を上げると、むんに鋭い視線を

浴びせた。

「聞いてどうする？」

「わたしたちは真佐吉に会いたいんです」

「ははは、真佐吉か」シュウは鼻で笑うと、「もう少しで我が隊は地下の全フロアを占領する。そうすればイヤでも真佐吉の顔が拝める。もっとも生きてままだという保証はできかねるが」

むんはアゴに手をやって、ひとしきり考えると、

「シュウさん、でしたね」

「ああ。シュウ・クワン・リーだ」

「わたしたちを地下に連れていってくれませんか？」

「……なぜそんなことをしなければならん」

「だって、ここを守ろうにも隊員さんは少ないし、さっきのシロヘビの件もあるし」

「首長竜か」シュウは自嘲気味に笑いながら、自分のレシーバーを示した。「たった今、本隊に連絡を入れたよ。白くて長い怪物が出たぞ。気をつけろってな。一笑に付されちまったぜ。寝ぼけるなってね」

「わたしが追いかけた時、ほらあそこ」と言つて、メインストリート脇の大きなスロープを指さした。大型トレーラーさえ入れる地下駐車場へと続く道だ。「白い頭があそこに消えていくのをチラッと見たんです」

「……………」

「あんなのがウヨウヨしてるとしたら、地下にいるお仲間が危険じゃありませんか？ 彼らが信用しないのなら、あなたが行って助けてあげなきゃ」

「君の最終目的は？」

シユウのままざしから嘲笑の色が消えた。むんはここぞとばかり身を乗り出し、

「わたしは、ただ真佐吉に会って、転送装置を借り受けただけです。友達のために」

「萌黄さんか——」

「知ってはるの？」

その時だった。地面が僅かに横揺れした。

「何ごとだ？」 雛田が両手を広げて腰を落とした。

「あ、アレを見て！」

むんが指差す方向、そこには自分たちが渡ってきた棧橋があり、いまだ数多くの群衆がいた。

その棧橋がゆっくりと斜めに動き始めた。

「動いてる！ W I B A が動き始めたんだ！」

叫んでいるあいだに、棧橋はねじれるようにして千切れ、人々は海の中に放り出された。

徐々に陸地が離れていくのが判る。手前で母親に押されて逃げてくる炎少年の姿があった。

むんは拳を握りしめ、キツとW I B A を振り返った。

「これで全ての駒が揃ったって言いたいんやね！」

WIBAは、その一隻の船としての機能を目覚めさせ、琵琶湖の沖合いに向かって出航を開始した。近江舞子の海岸が見る見る小さくなっていく。

引きずられていた栈橋は既に跡形もない。どんな動力なのか、むんには判らなかつたが、動き出してみると全く揺れを感じさせないことは、さすがに未来都市だと感心した。

その未来都市は今、伊里江真佐吉によって乗っ取られてしまった。目論んだ通り、リアルを集めるのに成功したので、これ以上の邪魔が入るのを防ぐ意味でもWIBAを動かしたのではないか。いやそれ以上に、これには真佐吉ならではのデモンストレーションが読み取れる。いよいよやるぞというわけだ。

呼び出し音が鳴った。シュウがレシーバーを持ち上げる。

「隊長代理の班からだ。さっきまで通信状況が悪く、つながらなかつたのだが……はい、こちら入口ゲート」

《——シュウ副長ですか》

「どうした、何かあつたのか？」

相手の声には力がなく、無理してしゃべっている様子

がありありとしていた。

《——やられました。我が隊はほぼ全滅です》

シュウの両肩に力が入るのが、端で見えていても判った。「どうした、何が起こった!？」

《——それが……よく判らないんです。西側の大階段を地下四階に降りたところにいたんですが……急にマシユマロみたいなものが通路を塞ぐように現れて……対処する暇もなく、我が班はその下敷きになってしま……》  
相手は苦しげに咳き込んだ。彼も負傷しているのだ。

「判った！　すぐそちらに向かう。待ってる」

シュウはレシーバーに噛みつくようにして叫ぶと、手を地面について腰を上げようとした。うっとうめいて顔をしかめる。シロヘビに突き飛ばされた際、彼も身体に大きなダメージを被っていたのだ。

「わたしにつかまって」

むんは素早くシュウの腕の下に自分の頭をくぐらせた。

「ま、待て」

「地下に行くんでしょ？　ひとりやったら無理よ」  
すると、反対側の腕を雛田が取り上げた。

「むんさんひとりでも無理ですよ。私も手伝います」

「おっ、心強いわあ」

シュウが立ち上がったのを見て、数人の迷彩服が重たい身体を持ち上げた。

「副長、我々も行けます！」

「——河合、武田、浅野、それに葛山か」

集まった迷彩服は総勢五人。援軍と呼ぶにはいささか少数で、どの隊員の姿もボロボロだったが、気合いだけは十分の精鋭たちのようだった。

「我々もついていきます」

後ろからやってきたのは、中村を初め、亡き五十嵐の信奉者たちだった。その中央に炎少年がいる。

《この人たちが力になってくれていていうんで、俺も行くよ。どうせ真佐吉とかいうマッドサイエンティストにも会う用事があるからね》

炎少年もPAIなしのしゃべりが上達したようだ。

むんは頷くと、集まった全員に向き直り、

「皆さん、ここから先は、何が待ち受けているか判りません。いっしょに来るかたは覚悟して」

誰もが気持ちを引き締めた。あの正体不明なシロヘビを思い出せば、緊張しないわけにいかなかった。

ポツポツと足許で水が跳ねた。

たれ込めた黒雲がとうとう泣き出した。雨足はすぐに強くなり、人々を地下の入口へと急がせた。

「落ちてる武器があったら拾ってきて！」

むんは駆けながらも、皆に的確な注意を促した。

萌黄は当たりに油断なく注意しながら、緩やかに下るスロープを歩いていった。

ここまでで気づいたことがいくつもある。まずは気温。階を降りるに従って寒くなるかと思っていたが、一向に温度が変わったという印象はなかった。これだけのフロアを一定の温度に保つのに、どれぐらいの空調設備が働いているのだろうか？

照明についてもそうだ。暗がりというものが存在しない。必ずどこかに蛍光灯や間接光があつて、たまに廊下の隅や階段下などに積み置かれた段ボールなどが作る以外、影を見るということがない。

(ものスゴ電気代がかかりそう)

いらぬ心配である。

気に入らないのは、萌黄の置かれている状況である。

真佐吉はどういうつもりでいるのか？

廊下の壁や天井、そして床までも、そのほとんどに液晶パネルが張り込まれ、敷き詰められている。W I B A が営業を始めたら、広告や行き先案内の文字や絵が踊るのだろうが、今は白いままである。それならそれでいいが、時たま、真佐吉が自分の姿を映すのである。何が鬱陶しいといってこれほど鬱陶しいものはない。

(わたしがどこに逃げようが、常にカメラが見ているぞと言いたいのか)

それならすぐにも捕まえればよさそうなものだ。なのに真佐吉はそうしない。萌黄は自分を探す男たちの足音や声が聞こえると、当たり前だが、逃げる。ひたすら逃げる。不案内な地下迷宮を地図も道案内もなしに。

男たちは決して萌黄を追いつめない。萌黄にはそれがわざとのように思えた。必ず逃げ道があるのだ。行き止まりに遭遇しても、少し戻ればまた別方向への廊下がある。

どうやら真佐吉はゲームと称しながら、萌黄をどこかに導きたいらしい。その証拠に、階段にたどり着くと決まって上のほうから追っ手の声が響いてくる。階上には行かせたくないのだ。

いつそリアルパワーで彼らを突き飛ばしてやろうかと思わないでもなかった。そうやって真佐吉の思惑とは違う道筋をたどり、違う場所に行き着いたら、真佐吉はどんな反応を示すだろうか。それでもあの数百人の男たちを総動員して、自分を元のルートへと誘導しようとするだろうか。

萌黄は思っただけでそんなことをするつもりは毛頭なかった。遅かれ早かれ真佐吉とは出会える。その時に真佐吉に主導権を握られないよう、彼の仕組んだ罠に陥るのだけは避けなければ。

ここは真佐吉の城だ。すでに彼の虜になっていると考

えれば、今さらくよくよ心配してもしょうがない。

(なるようにしかならへん)

てくてく歩きながら、そんなことを考えていると、何十回目かの四つ角に差し掛かった。これまで歩いてきた廊下もそうだったが、延々と壁とそこに取り付けられた扉があるだけで、将来はコンビニになりそうだとか、洋装店のショーウィンドウになりそうだとかいうような場所は皆無だった。今いる四つ角にしても同じで、左に見ても右に目をやっても、これまでと似たような風景が続いているだけだ。もちろん正面も同様に。

ただひとつ、ここまで一度もお目にかかったことのないものが壁に張り付けてあった。行先表示板だ。四つ角の中心に天井からぶら下げられている。

→奈良

←エンジェルフォール

(『奈良』? 『エンジェルフォール』? 天使の滝つて、何それ)

萌黄は左右の廊下を透かすように眺めた。どちらも途中で折れていて先が判らない。

(わざわざ案内するくらいやから、どっちかに進めってメッセージなんやろうけど……どっち行こ?)

腕組みしてひとしきり悩んでいると、前方の廊下から話し声が聞こえてきた。扉ふたつ向こうの左に階段があるらしい。声は上から降りてくるようだ。

萌黄はよしと声に出して、右への道、『奈良』方面に足を向けた。

「奈良の物産展でもやってたりして」

もちろんそんなものがあるとは想像もしていない。きつとこれも罨なのだ。それでも構わない。ただ、何があっても驚かないでいよう。

萌黄は神経を八方に広げながら、廊下を道なりに折れた。

#### 4

廊下の角を折れると、突き当たりには観音開きの大きな扉が待ち構えていた。学校の体育館にあるような鋼鉄製のやつだ。

背後から声が迫ってくる。萌黄は急ぎ立てられる思いで扉の把手をつかむと、全体重をかけて手前に引いた。扉はギギギという軋み音を上げながら開いた。

中は体育館ほどの広い空間になっていた。天井は高く、眩しいくらいの蛍光灯が部屋の隅々まで照らしている。なのに誰もいない。部屋には設備らしいものは一切なく、

数個の段ボールが片隅に散乱しているぐらいだ。お掃除ロボットが掃いたのかと思うほど床がきれいなのは、これまでに見てきた廊下や部屋と同じだ。

左側の壁沿いには、これも例のごとく、いくつかの扉が並んでいる。

「どこが奈良なん？」

多少の期待はしていたのにこの有様。萌黄は拍子抜けして、床に胡座あぐらをかいて座り込んだ。床はほんのり暖かい。

「物産展の商品搬入前やったんかなあ、やっぱり……」

萌黄は冗談を口にしながら、両腕を伸ばして大欠伸をした。そして首の凝りをほぐすようにぐるぐると回した時、彼女の目はあるものの上で釘付けになった。

左の壁に並んでいる扉。珍しくそれぞれの扉のあいだには窓があった。萌黄の目を引きつけたのは、真ん中の扉の右上に取り付けられた表札だった。

光嶋

と書かれている。

萌黄はゆっくり立ち上がり、おそるおそる扉に近づいた。

間違いない。彼女の名字である。しかもじつさいに住

んでいる家の表札と寸分違わない字体で書かれている。

あらためて扉を眺める。よく見れば、扉の色も形も、ドアノブさえも、萌黄の実家にあるのと全く同じ造りだ。少なくとも同じメーカーによる同じ扉がここには取り付けられている。

頭の中が真っ白になった。だからドアノブに手をかけたのも無意識だった。握ったドアノブをぐっと押し下げ、手前に力いっぱい引く。鍵はかかっていたいなかった。

見慣れた玄関の三和土<sup>た</sup>が<sup>た</sup>きがあった。すぐ右にシューズボックス。その隣りには全身を映せる鏡の取り付けられた縦長の戸棚。三和土の先には廊下が伸びており、左右にそれぞれふたつずつドアが配置されている。

(わたしの家や……)

目を落とすと三和土の隅には、萌黄愛用のサンダルがあり、隣りに母親のポンプスも並んでいる。

萌黄は込み上げてくる笑いを抑えられなかった。こんなオフザケ、笑うに限る。

「へ奈良〱ってこのことやったんやね。ずいぶん手が込んでるやないの」

どんな意図だかは不明だが、ここが萌黄のために用意されたものであることは確かだ。

中に足を踏み入れる。扉がカチリと閉まった。

運動靴を脱ぎ、フローリングの廊下に両足を乗せる。

かすかに軟らかな踏み心地も記憶にあるとおりだ。

奥のリビングとの境目にあるドアは開いていた。そちらに向かおうとした時、すぐ右のドアの内側からジャーンというパソコンの起動音が聞こえてきて、萌黄は飛び上がるほど驚いた。

（誰かいてる？）

萌黄は動悸の収まらない胸に手を当てながら、ドア越しに中の気配をうかがった。それっきり物音はしなかった。萌黄は勇気を出してドアを開けてみた。

そこは萌黄の部屋だった。タオルケットをかぶったベッドがあり、勉強机とパソコンラックが彼女の知っているとおり場所に置かれていた。

部屋には誰もいなかった。クローゼットを開け、ベッドの下を覗いてみたりしたが、やはり人はいない。

萌黄はパソコンの前の椅子に座った。愛機のMacは起動中である。やはり起動音はこのMacが発したのだ。「ひゃっ！」

画面を見た萌黄は、あることに気づき、慄然とした。

「な、なんで文字が——」

そう、画面に表示されている文字はどれも左右反対ではなかった。萌黄はキーボードに目をやると、二度驚いた。テンキーが右側にあつて、どのキーに書かれた文字も正置文字だった。

「あつ」

三度目の驚きはもつと大きかった。萌黄はのけぞるようにして椅子から身体を浮かした。

なぜ気づかなかったのか。この家の間取り、家具、何もかもが、萌黄が後にしてきたリアル世界の家と全く同じだったのだ。

壁に貼られた揣摩太郎のポスター。そこに書かれた彼の名前も正置である。

萌黄はいやでも、自分は元の世界に戻ることができたのかと錯覚せずにはいられなかった。

ベッドの上に放り出してあるトートバッグに手を伸ばす。中をまさぐって財布と定期入れを取り出した。じやりりと手の平に乗った十円玉も百円玉も、さらには千円札も元の世界のものとそっくり同じだった。

つーつと涙が落ちた。不覚にも泣けてきた。

ホームシックにかかった自分を見て、真佐吉はどこかでせせら笑っているのだろう、してやったりとほくそ笑んでいるだろう。そう思っても、出てくる涙はなかなか止まらなかった。

「帰りたいーっ。うーっ」

感情のコントロールが利かなくなり、萌黄はベッドに突っ伏して泣いた。あふれる涙がタオルケットに吸い込まれていく。

どこか遠くからガーツという音が流れてきた。ハツとして顔を上げる。記憶にある音。マンシヨンの前を走る近鉄電車だ。

とつとつとつ頭上で詰まった連続音がした。これも知っている。上の階に住む若夫婦の一人娘。まだ三歳くらいの子供が走っているのだ。

「にゃおん」

(——！)

不意打ちのようにその鳴き声は萌黄の思考を中断させた。顔を上げると、パソコンラックの裏から出てきた白いものが目に入った。

「——ウイル？」

萌黄は目にたまった涙を拭おうと右手でこすった。その際に、白い動物は開いたままのドアのところまで駆けた。

萌黄の目と動物の目が合った。死んだはず愛猫ウイルがそこにいた。

「にゃおーん」

ウイルは大きな口で鳴くと、お尻を向けてリビングのほうへと走り去った。

「待って！」

萌黄はウイルスを追って廊下に飛び出した。

逆光でシルエットになったウイルスが、リビングの入口で萌黄においでおいでをするように手を舐めている。

「逃げんでもええから」

萌黄は四つん這いになると、そのまま廊下を進んだ。

ウイルスとはよくこうして遊んだのだ。

あと少しで尻尾に手が届くというところで、ウイルスはひよいと身体をひるがえし、ソファの間に駆け込んでしまった。そしてまた一声にゃおーんと鳴いた。

萌黄は立ち上がり、誘われるようにリビングへと入っていった。

「ああ……」

萌黄は両肩から力が抜けていくのを覚えた。予想はしていたが、予想以上の懐かしさが萌黄を包んだ。

リビングの光景は、十二日前に彼女が後にした時のままだった。

テレビはスイッチが入っていて、朝の連続テレビドラマを放送中だった。萌黄はリモコンを取り上げてチャンネルを変えてみた。どのテレビ局も通常の情報番組やドラマの再放送をオンエア中だ。リアルやヴァーチャルといった言葉の飛び交う特別番組など、どの局もやっていない。さらに当然のように画面に映し出される文字は全

てへ正置〱だった。

テレビの時刻表時は、八時二十五分。この時間には母親はすでに出勤していない。食卓の上を見ると、紙切れが置かれている。萌黄はそばに行つてそれを拾い上げた。『今日は遅くなりそうだから、夕飯は冷蔵庫の中のをチンして食べててね』

母の走り書きである。脇にはラップで包まれた皿。中味はまだ暖かい目玉焼き。

萌黄は母のメモに鼻を押しあてた。母のおいをかきとろうとするかのように。

かすかなざわめきが耳をくすぐった。とろんとした目をバルコニーに面したガラス戸に向ける。レースのカーテンを透かして外の光景が見える。

萌黄はカーテンを開き、さらにガラス戸も開けた。途端にアブラゼミの合唱が洪水のように押し寄せた。空は高く、陽射しはキツイ。まだまだ夏なのだ。

六階のバルコニーの正面は、小高い丘になっている。そこをぐるりと巡る形で一本の道が伸びており、いろんな人が下りてきていた。

腕時計を睨みながら駅へと急ぐサラリーマン。子供を乗せて幼稚園に送るべく自転車を漕ぐ母親。マンガを広げながら遅刻覚悟で悠然と歩いていく男子高校生。平凡な朝の風景が眼前に展開している。

萌黄は自分がどこにいるのか、忘れそうになっていた。ふとすぐそばで何か動く気配がした。首をねじると、食卓の上で丸くなっているウイルスがいた。

「コイツう」

萌黄はいつもの調子で首根っこをつかんでやろうと、ゆっくり腰をかがめて、ワツと手を伸ばした。

萌黄の手の平は虚空をつかんだ。

彼女の手はウイルスの身体を素通りしたのだ。

——立体映像。

萌黄は瞬時に状況を読み取った。

全ては作り物、まがい物、用意された物だったのだ。

初めから判っていたはずだった。なのになんか真佐吉の術中に陥り、ひよつとしたらという油断に相手のつけいる隙を生じさせ、見事なまでにその気にさせられてしまったのだ！

萌黄は食卓の置き時計を右手に持ち、バルコニーに出て、思いつきり遠くへ投げ飛ばした。

置き時計は道に届くまでもなく、空中で目に見えない壁に激突し砕け散った。道を歩く人々は誰も顔を上げようとはしなかった。

(これも映像……！)

いつの間にか、ウイルスの姿は消えていた。部屋の様子まで色褪せて見えた。萌黄は肩を怒らせて、一直線に玄

関に向かった。再び涙が込み上げてきたが、今度は悔しさの涙だ。

靴を履き、玄関を飛び出した。萌黄はそこでウツと息を飲んだ。

さきほどの体育館ではなかった。自宅前の共用通路が左右に伸びていたのだ。正面の手すり壁の遥か下の線路を、いま近鉄特急が猛スピードで通過していく。

「いい加減にして！」

萌黄は足を踏み鳴らしながら、通路をエレベータのほうへと向かった。だが手前の階段まで来ると、気が変わり、階段を降りることにした。エレベータに乗ってこれまでいいことがあった試しがない。そんな思いが心をかすめたからだ。

階段に足をかけた時、萌黄は思わず首をひねった。さっきまではこんな階段などなかった。なのに立体映像でもなくちゃんと下に降りることができる。

(もしかしてさっきの体育館が映像???)

このままでは自分の目が信用できなくなる。これから触ってみないと、と自分を戒めた。

ひとつ下の階も萌黄のマンションの体裁で両側に扉が点々と続いていた。気まぐれにそのひとつのドアノブを回してみた。

「あぐうっ」

またしても萌黄は度肝を抜かれた。中はマンションの一室ではなく、どこかの一軒家のダイニングらしかった。らしいというのは、まるで爆弾を投げ込んだかのように、壁が剥がれ、天井は抜け落ち、床には焦げ痕も生々しい穴がいくつも空いていたからだ。

こわごわ上体だけを中に入れて覗き込むと、床に倒れた人間の姿が目に入って、思わず両手で口を押さえた。

倒れているのはふたり。どちらも迷彩服を着ているが、ひとりは胴体をふたつに裂かれ、胸から上と腹から下が別の場所に落ちていた。

萌黄は強烈な目眩に襲われた。かろうじて後ろのドアにもたれ、倒れることだけは避けた。ぐるぐると回る視界を閉じたまま、萌黄はドアの外に出た。

彼女の見た光景は、忘れることもない、初めて迷彩服たちと遭遇した学園前のモデルハウスだったのだ。

(ひどい……なんでこんなモンを再現すんの……)

ドルルルル。

エンジンらしき重低音が空気を震わせた。萌黄はすぐる思いで音のする方向を探った。

「あつ、ここは！」

意表を突かれる光景が萌黄を取り囲んでいた。ここがどこなのかもすぐに判った。

伊里江兄弟の秘密基地。その地下脱出口。エンジンの

音はまさにいま発進しようとしている潜航艇のものだった。

「待って！」

萌黄は叫ぶと転びそうになりながら水辺へと走った。しかし潜航艇は彼女の声に気づくことなく、その船体を水中に沈め、徐々に遠ざかっていった。

残された萌黄はがっくりと地面に膝をつき、はあはあ  
と息を弾ませながら、濃緑色の水面を見つめた。

（何を勘違いしてるんよ。これはあくまで再現されたもので、潜航艇も立体映像に決まってるやんか。この海への出口も――）

膝の下に落ちていた石を拾い上げる。これは本物だ。萌黄はそれを力まかせに水面に投げつけた。ところが予想に反して、ドボンツと水の跳ねる音がして石ころは水中に沈んでいった。あわてて水際まで膝を寄せ、手を伸ばしてみる。冷たかった。この水は本物だ。

さらに水に濡れた岩に指を這わせてみた。ゴツゴツとした感触も本物である。

萌黄は目の眩む思いで立ち上がった。頭の中ではここはあの淡路島洲本沖の無人島の地下ではないと理解しているつもりだ。しかし肌に絡み付くような湿度の高い空気、すぐそこでゆらゆらと揺れている潜航艇の台座、天井からみのむし蓑虫のように垂れ下がっている裸電球の群れ。完

壁なまでの再現力。鬼気迫るほどの臨場感に、萌黄の判断力は揺らいでいた。

「……………」

話し声が断続的に空気をつたつてくる。ずっと先ほどから聞こえていたようだが、少しずつ大きくなってきたのでようやく萌黄の耳が捉えたのだった。

(英語の会話……………米軍……………)

萌黄は頭の中の妄念を振り落とすべく、激しく首を振った。逃げないと。早くここから。でもどこへ？

前にはまるで地獄に続いているような、底の見えない海水。あの中を潜っていくのか。それとも米兵たちを蹴散らして地上に活路を見出すのか？

「——助けて」

英語の話し声に突然日本語が交じった。

「——助けて、助けて」

(ヴァーチャル伊里江さん！)

「——萌黄さん、助けて、殺される」

萌黄はつんのめるようにして、ここまで降りてくるのに使った脱出口に向かった。重傷を負ったヴァーチャル伊里江が、米兵から拷問を受けている図が瞼の裏に浮かんで消える。わたしが助けないと、リアルわたしが。シュルシュルと布のこすれる音がした。萌黄は足を止めた。すると、脱出口から米兵が現れたではないか。そ



あと少しで上に届くはずの指がつるりと滑り、上半身が泳ぐような格好で宙ぶらりんになった。

「うわわわっ」

「危ない！」

身軽な揣摩太郎の手が、ガシツと久保田の襟首をつかんだ。

「気をつけてくださいよ」

「しようがないだろ。まさか揺れるとは思わなかったんだから」

彼らは今、長いハシゴを降りている最中だった。

久保田は遙か下を見おろした。モクモクと煙を吐き出す小さな煙突が、まるでミニチュアの工場地帯のように並んでいる。明かりもほとんどなく陰気な眺めは自分まで機械の部品になったような気分させる。加えて、騒々しい機械音や蒸気を噴き上げる音が常時鳴り響いていて、このままでは耳が馬鹿になってしまいそうだった。久保田はうんざりした顔で指で耳の穴をほじくった。

「気を抜くと、また落ちますよ」

今度は和久井助手が大きな声で注意を促した。

「また、って落ちてないですよ」

久保田は口を尖らせて言い返した。

ハシゴは二十メートルほどを降りると、鉄板を水平に張っただけの踊り場があつて、また二十メートルのハシゴという繰り返しが続いてきた。久保田たちはすでに十数回このリズムで降下してきたのだが、まだ先はその数倍あるようだ。

鉄板に大の字になつて転がった久保田は、

「もうダメだ。元来俺は高いところが苦手なんだ」

続いて揣摩、和久井が降り立った。先に到着した柳瀬は、腹這いになつて下に向けた双眼鏡を熱心に覗いている。

「久保田さんさ」揣摩が訊ねた。「さつき揺れたとかつて言つたよね」

「落ちそうになつた言い訳だなんて思わんでくれよ。この鼻の詰まりそうな油の臭いやら、サウナみたいな気温など屁でもないからな。いや、失礼」

久保田は和久井に頭を下げたが、まんざら平気そうでもなかった。

「違いますよ。じつは俺もあの時、WIBA全体が揺れたような気がしたから訊いたんです」

「ワタシも感じたわヨ」

柳瀬が双眼鏡から目を離さずに言うと、和久井も同じくと頷いた。

「なら、実際揺れたんですよ」

揣摩はにつこり微笑むと、両手の平を上に向けたまま、左右に揺さぶってみせた。

「そうか、それならよかった……よくないぞ！ ちよつと前、WIBAが動き出したと言ったよな。あの時でさえほとんど揺れは感じなかったのに」

「そう、そこが問題です。さつきも話したとおり、俺はずっとWIBA社長である宝井さんの見張りをやらされてました。だからいろんなことを直に聞けたんだけど、WIBAはハリケーン級の嵐にでも襲われない限り、体感できるような揺れは絶対に起きない。それだけは太鼓判を押すって言ってました」

「そりゃ、頻繁にユラユラしてた日にゃ、怖くて誰も遊びになんか来てくれないわな」

揣摩は胸ポケットから黒い小型パソコンを取り出した。宝井社長所有の一物だ。WIBAの全システムのモニターがこれ一台でできるようになっているという。なぜ揣摩がそんなものを持っているかと言うと、彼曰く「以前、社長がオーナーのホテルでディナーショーをやったことがあって、それ以来の顔見知りだったんだ。それに社長の愛娘がダ・ヴィンチの大ファンだったってことも点数アップの理由かな？」

揣摩は社長を留置施設へ護送する任を真崎隊長代理か

ら直々に受けた。

揣摩と柳瀬は社長をジープに乗せて近江舞子を後にするや、自分の正体と迷彩服に紛れ込んだ事情を打ち明けた。そして身柄を自由にする変わりに、W I B Aに誰にも知られず、潜入する方法はないかと訊ねた。その時に譲り受けたのがこの黒い小型パソコンだった。社長はこう言った。『危険は伴うが、排気ダクトをつたっていけば可能だ』と。そこだけは監視システムの〈目〉はないというのだ。

W I B Aが、その停泊していた近江舞子から碇を上げ、琵琶湖の中を移動し始めたのを知り得たのも、この小型パソコンのおかげだ。そうでなければ、あの時、ずらりと並んだ煙突が一齐に白い煙を吐き出した理由が判らなかつただろう。

「それで、肝心のさつき感じた揺れの理由は何だい？まさか水上スキーを避けようとしてW I B Aが曲がり損ねたなんてんじゃないだろうな」

揣摩は画面を睨んでしばらくウーンとうなっていたが、やがて顔を上げ、

「この十分で報告された異常は一件だけです。地下十五階の〈倉庫〉で急激な圧力上昇が発生したらしく、それが原因で隔壁のいくつかが壊れたようです。海水の浸入も見受けられます。理由として考えられるのは、これぐ

らいですねえ」

「俺たちが今いるのは何階？」

「このレベルは、と——地下七階に相当します」

「まだそんなところなのか！ ぬあー」

久保田は大の字になって寝転がった。

「とりあえず」揣摩は立ち上がった。「地下十階まで降りれば、あの煙突群は抜けられます。少しは涼しくなるでしょう」

「その甘い言葉が今の俺を支えている」久保田はどっこいしよと身を起こした。そしてまだ双眼鏡を構えたままの柳瀬に向かって、「正義の戦士、柳瀬よ。行く手を邪魔する者はいないか？」とワザとマジメな口調で話しかけた。

「——いたワ」

「いた？」

「煙突のあいだの通路を動き回ってる。どうやら自走式の監視ロボットのようネ」

「そんな」揣摩は柳瀬から双眼鏡をひったくると、柳瀬の隣りに並んで煙の中にレンズを向けた。

「——本当だ。玩具のバスみたいな形をしてるぞ。社長の話じゃまだ倉庫で眠ってるはずだったんだが」

「真佐吉の野郎だ」久保田が断言した。「真佐吉かその手下が早々と手を打ちやがったんだ」

「いずれにせよ、邪魔立てする奴らは蹴散らすまで！」  
戦士柳瀬はすつくと立ち上がると、腰に手を当てて決めポーズを作った。「五つの力をひとつに合わせ、世界を守れゴレンジャー！」  
「古っ。しかも四人しかいてないし」  
ぼそりと和久井が言った。

7

《…溜まりに溜めたりリアルパワーを発散させたか》

真佐吉の声が、明かりの消えた部屋に響き渡った。

《やられたな。見事だと賛辞を贈らせてもらおう。さすがは私の見込んだ娘だけのことはある》

ぶら下がっていた天井のパネルがはがれ落ち、すでにパネルや建材などで瓦礫の山となっていた床で、ガシャングシャンとけたたましい音を立てた。

《おーい、萌黄さーん、生きてるかね？》

返事はない。動くものもない。

《しかたがない。彼らに助けに来させるか》

それつきりラジオのスイッチが切れたように、真佐吉の声はしなくなった。

しばらくして、隅に落ちた液晶パネルの下でごそごそと動く気配があった。

「けほけほっ」

萌黄は軽く咳き込むと、またじつと息を殺し、辺りの様子をうかがった。そしておもむろに両腕を広げると、手の平を床に突っ張って、パネルに挟まった身体をぐいと引き抜いた。

わずかに破壊を免れた照明が間接照明のように萌黄の姿を薄く照らしている。Tシャツもジーンズも真っ白である。砕けた建材などが粉になって萌黄の上に覆い被さったのだ。ぺっぺっと口の中に入った粉を吐く。おそらく髪の毛も真っ白だろう。

(とっさのことやった……)

Tシャツの前を払って、顔を拭う。ざらざらとした感触が顔面全体に走る。あーたまらなく顔を洗いたい！

迫ってくる米兵たちがホログラフィ立体映像であることは、吹きつけた空気の塊に倒れなかったことで判った。(考えてみたら、こんなところに筋骨逞しいアメリカ兵が駐屯してるワケないし)

冷静になった萌黄は、真佐吉への怒りをエネルギー放出という形で表現したのだった。そう、京都工大の地下でもやってみせた、カゲヒナタのギャグポーズで。

部屋全体が大揺れした。室内に大竜巻が発生し、液晶パネルをことごとく剥がして吹き飛ばし、床、壁、天井を問わず叩き付けた。結果的にはいくつもの部屋をまた

ぐような被害を与えたらしい。ひび割れはいたるところに走り、柱は折れ曲がり、天井からはダクトや電線が限りなく垂れ下がっている。

地震を起こすと同時に、怪我をしないよう身体をエアクションで包み込んだのは大正解だった。それでも見える範囲で、腕は青痣あざや擦り傷だらけだったが。

部屋の隅で水がゴボゴボと泡立っている。潜航艇の潜った海水は本物だったらしい。周囲の岩もわざわざこしらえたものだったが、それ以外は全て液晶に映った平面映像と立体映像。まるでハリウッドのSF映画のようなCGと実写の合成だ。これがUSJのアトラクションならブラボーと叫んであげたろう。

萌黄は音を立てないように注意を払いながら出口へと向かった。急いで逃げよう。真佐吉の手下とは出くわしたくない。できれば今は闘いたくないのだ。どこかでゆっくり休息をとりたい。真佐吉の趣味の悪い企みのせいで疲れた心を癒したい。

思い出しただけでも胸がむかむかする。他人の悲劇は喜劇というが、真佐吉は萌黄がWIBAにたどり着くまでに味わった苦難や苦労をもう一度体験させ、さらには懐かしんでもあまりある我が家を再現して萌黄の心を弱め、激しく揺さぶった。真佐吉はそんな萌黄の様子をどこかで眺めながら、マゾヒスティックな笑いを浮かべて

いたのだろうか。きっとそうに違いない。

倒れた壁をいくつも乗り越えて、ようやく進めそうな廊下を見つけた。足音はしない。とりあえず前に進もう。心はズタズタ、気持ちはクタクタだが、身体は「爽快」の一語だった。前するときほど腑抜けにならなかったのは慣れたせいだろう。

ふと萌黄は疑問を感じた。

地震——WIBAでは適切な表現ではないが——を起こしてエネルギーを発散した萌黄は、リアルとして爆発する臨界点の日がまた先に伸びたことになる。これは、二日後にXデーを控えた真佐吉にとって、非常にマズいことではないのだろうか。たとえ萌黄が真佐吉の手に落ちたとしても、自分だけは爆発しない。それでは都合が悪いのではないか。

（結局、わたしにいやがらせした罰が当たったんやな）

萌黄は上目遣いで天井に視線をやった。そして痛む膝や腰の辺りをさすりながら、階段を探して歩いていった。

「隊長代理！ 真崎さん！」

頬をはたかれた真崎はうつすらと目を開けて、自分を心配そうに見ている顔を見上げると、

「……シユウか。なぜここにいる」

シユウはホツとした顔をすぐに引き締めると、

「勝手に持ち場を離れて申し訳ありません。隊長代理の部隊から救援の要請がありましたので」

西側の大階段。地下四階の手前には広範囲に渡って無惨な光景が広がっていた。点々と、あるいはひとかたまりになって倒れている迷彩服たち。そのほとんどが半分まで砂状化が進行している。シュウに連絡してきた隊員も手首のあった辺りにマイクを落とし、砂となって原形をとどめていなかった。

真崎を除いて、生存者はひとりもいなかった。

「我が地上部隊は、ほぼ壊滅しました」

「壊滅だと？」

シュウはその目で見たままを真崎に報告した。白い怪物が登場したくだりになっても真崎は「馬鹿な」とは言わず、最後まで怖いほど鋭いまなざしでシュウの話を聞いていた。

「すると、あれがそうだったのか……。突然、上のフロアから巨大なマシユマロのようなものがせり出してきた。我々は退却する暇もなく飲み込まれた。それきり私は意識を失ってしまった」

真崎の言うとおりでたとすると、隊員たちは、地上で暴れまくったシロヘビが巣に帰ろうとするところを偶然鉢合わせし、踏みつけられて圧死したものと思われる。

「後ろの連中は何だ？」

真崎が指さす先に、むんや雛田らがいた。その後ろからも続々と仲間たちが階段を降りてくる。

「すみません。私も生き残った隊員たちも、自力でここまでたどり着くことはできず、彼らに力を借りざるを得ませんでした」

むんが真崎のことなど構わず、階段の手すりに身体を乗り出して、下の階を覗き込んだ。

「怪物は下の階に逃げたみたいやね」

碎け落ちた壁やぐにやりと曲がった手すりなど、重たい身体を引きずった跡が随所に残っていて、それが地下深くへと続いている。このまま行けば、再びあの怪物と出会うことになるだろう。

むんはぐくりと唾を飲み込んで、仲間たちの様子を見た。地上に続いて二度目の凄惨な現場に、さすがに臆した表情を浮かべている。それでも彼らの新教祖となった炎少年がハイテク車椅子を階段昇降モードに変形させ、自力で降りてくるのを目の当たりにすると、まるで彼から勇気をもらったように元氣な声を掛け合っている。

「いくぞー！」 「怪物を倒せー！」

炎少年は萌黄たちに遅れてようやくフロアに到着した。そのまま次の階段に向かうのかと見ていると、真っ直ぐこちらに進んでくる。その先には真崎を肩を貸して立たせようとしているシュウがいた。

むんの目に炎少年の車椅子から銀色のマジックハンドが伸びるのが見えた。その先端にキラリと光るものが握られている。ナイフだ！

「ちよつと、あんた何をしよう——」

わけも判らないまま、少年の行動を制しようとするむんは前に出た。それよりも早く、少年のマジックハンドはくの字に折れ曲がった腕を反動をつけて伸ばし、迷彩服の腕を切り裂いた。

8

むんは「ダメッ」と叫びながら、ナイフの描いた軌跡を目で追った。

切り裂かれた迷彩服の袖は、旗のように壁際に向かつてなびき、わずかな間があつて赤い血がほとばしり出た。「ウウツ」

悲鳴が上がる。聞きつけた他の隊員が反射的に身体を向けて銃を構える。民間人の仲間たちがわつと頭に手をやる。炎少年の母親が何ごとか喚きながら、あたふたと駆け寄ってくる。

むんは足許に落ちていた死んだ迷彩服の銃を拾い上げると、持ち帰る間もなく銃把の部分をマジックナイフを叩いた。ナイフは木の葉のようにくるくる回転しながら

床の上に落ちた。

「貴様ツ！」

地上からいつしよに降りてきた生き残りの迷彩服隊員たちが、炎に銃口を突きつけて囲んだ。母親が彼らのあいを割って入ろうとするが、すぐに突き飛ばされて階段の登り口に倒れた。打ち所が悪かったのか腰を押さえようめいている。

「シュウさん、大丈夫!?」

大丈夫なわけではない。飛び散った血の量と、床に垂れた血溜まりが傷口の大きさを物語っている。

「私じゃない！」

「えっ？」

「真崎さん！」シュウは隊長代理を抱えたまま、救護班に連絡を取れと叫んだ。

「——騒ぐな」真崎は右肩を押さえながら苦痛に顔を歪めている。「たいしたことはない」

「そんな——砂状化が始まったら大変です！」

『平気だよ、そのくらいの怪我』

炎少年の声が車椅子のスピーカーから流れ出た。まるで仕掛けたいはずらに友達がもの見事にはまったような喜びの感情が含まれていた。

『その人は砂になったりしやしないぜ。なあ、リアルのおっさん』

リアル????

その場にいた者は、ひとりとして少年の言葉を理解できなかった。むんでさえ「あっ」と叫ぶまでに数秒を要した。

『否定したかったら、おっさんその傷口を見せてみるよ。できないだろ？ ハハハハハ』

少年は笑ったが、他には笑う者はいなかった。

「狂ったか、小僧！」シユウはわめくように言い返した。「そんなワケがないだろう！」

『ところが、あるんだよ』

吐き捨てるように言うと、少年は車椅子の向きを変えた。そして動けない身体の真後ろにある機械が伸び上がったかと思える間に、小型のビデオカメラが現れた。

前置きもなく、カメラのスイッチが入り、四角い光が液晶パネルで覆われたグレーの壁面に投影された。

それは入口ゲートでの五十嵐対曾我部の戦いを収録したビデオ映像だった。

『早送りするぞ』

画面はチャカチャカと動き、五十嵐が曾我部を斬り捨て、残る迷彩服たちに襲いかかっている場面で、元のスピードに戻った。

ふいに左手から白く長い物体がフレームインした。むんがシロヘビと呼んだ化け物だ。シロヘビは五十嵐をく

わえると上下左右に振り回し始めた。怪物に自由を奪われた五十嵐はそれでもサーベルを化け物の身体に突き立てようと躍起になっている。

やがてシロヘビは五十嵐を味の抜けたガムのように吐き捨てた。と、炎少年は巻き戻した。そしてある画面に来ると静止し、拡大ズームした。

『ほくら、目ん玉ひんむいて、よつく見やがれ』

シロヘビが正面を向いている。こうしてじっくり見せられるとヘビというよりウツボに似ているとむんは思い直した。

『化け物の顔だ、といってもアンタらの濁った目じゃ見えやしないだろう。こうしてやるよ』

言い終えるや、画像のコントラストが上がった。すると画像はわずかな陰影がくつきりと目立つようになり、シロヘビの顔についた無数の皺が浮かび上がった。

『皺じゃない』少年はむんの心を読んだように言うと、

『ジイさんのサーベルが付けた傷だ』

するとビデオカメラの隣りに、また別のビデオカメラが出現した。

次々と繰り出される装置や映像に、この場にいる者は全員、魂を抜かれたようにひたすら画面を見つめていた。だが二台目のカメラが真崎の顔を画面いっぱいに見せた時、わずかなどよめきが起きた。

『フン、もう気づいたヤツがいるみたいだな』

言われてからむんもハツとなつて両手で口を塞いだ。

シロヘビと真崎の拡大画像。並べるのもバカバカしい二枚の画像には否定できない共通点があった。

顔についた傷。

炎は二台のカメラ軸を回転させ、両方の画像が重なり合うようにした。傷の位置はほぼぴったりと一致した。

「……何の話をしてる？」つぶやいたのはシュウだった。

「傷が同じだって？ 化け物と隊長代理が？ そんなもの偶然に決まってるじゃないか。バカバカしい」

シュウは真崎の腕の傷をあらためようと手を伸ばした。しかし真崎は身体を傾けてそれを拒んだ。

「隊長代理？」

『これだから大人ってダメなんだ！ 先入観ばかり膨らませて、自分の目で見たものを信用しやしない！』

「飛躍しすぎなんよ」むんが助け舟を出した。「もつと順序立てて説明しなさい」

『あくあ。直感力の鈍い人間相手はめんどくさいぜ』

画面が切り替わった。今度は現在のこのフロア、それも砂になった迷彩服隊員たちの倒れているあたりを映した画像だ。

『これじゃ判りにくいや。行列演算を施して、回転して、と』 画像は降りてくる階段から見おろした構図から、

真つ直ぐ真上、それも高いところから見おろしたような画像へと変化した。と同時に、床に散乱している迷彩服、本来の意味での隊員服の上に1から順番に番号が付けられた。

『全部で二十四ある。ところがココを見る』フロアの少し離れた場所に落ちている砂のかたまりを、指示棒を持つマジックハンドが指し示した。『ここにも遺体があったんだ。ところが服だけがない。どうしてだろね？』

また唐突に二台目のカメラが別の映像を壁面に投影した。右端にLIVEという文字が見える。

画面の中央に、少し斜めになっているが、〈渡嘉敷〉の文字が読めた。そして画面は急速ズームアウトした。その名前が書かれていたのは、まさにいま壁に背をもたせかけている真崎の襟裏を映したものだった。

『あれっ、おっさんの本名は〈渡嘉敷〉だったのか？』真崎をかばうように折り敷いていたシュウが、カバツと立ち上がった。その目が真崎の襟を覗くと、信じられないものを見るような目付きで訊ねていた。

「……どういことですか、隊長代理。説明してください」

真崎はすると、ゆらりと腰を上げた。そしてナイフで切られたほうの腕を上げると、そこには銃が握られていた。

「ハイテク坊やの眼力を軽視した俺のミスだな」  
左手が傷口から離れた。破れた服の隙間から腕の付け根が見えた。驚いたことに、傷口は砂状化もせず、ほとんど消えかけていた。

「危ない！」

誰かが叫んだのと同時に、銃弾が炎少年の額に向けて発射された。

しかし銃弾は彼の前に飛び込んできた人物によって遮られた。

「ほのお……」

胸を真っ赤に染めた母親の身体が、ゆっくりと傾いていった。

## 9

真崎はチツと舌打ちして銃を持ち直すと、すぐまた少年の上に照準を定めた。

「待ってください！」

シュウは青ざめた顔で横ざまから真崎の腕をつかむと、引き金に指をかけた銃ごと無理矢理上向かせた。

真崎は無言のまま、そんなシュウの胸をドンと押した。シュウの身体はまるで爆発シーンで飛ばされるスタントマンのように空中を飛翔し、背中から反対側の壁に激

突した。

誰もが驚愕した。すつとひと突きで人間が軽々と飛んだのだ。

だが、シュウも優れた傭兵のひとり。後頭部を庇つてうまく受け身をとると、起き上がりざま、真崎に対して腰から抜いた銃を構えた。

それに対し、真崎は腕を垂れ、肩から力を抜いてみせた。

シュウは油断なく相手を見据えながら、

「あなたは、本当に隊長代理の真崎さんですか？」

「他の誰だというんだ？」

「……………」

むんはタイミングをはかって、倒れた炎の母親のそばにひざまずいた。

「おばさん！」

「……………ほの……………」

床に横たわった母親は、かすかに唇をわななかせた。

『くそっ！　なんでだよ！　なんでこうなっちまうんだよ！』炎の怒声がスピーカーを激しく震わせる。『おい、その姉さん、リアルはどっかにいないか？　リアルパワーがあれば助かるんだろ!？』

呼ばれてむんは伊里江を探したが、その姿はどこにも見えなかった。先を急いだむんたちについてくること

できなかつたのだろう。

『くそー、ここにいるリアルは俺だけかよ。どうすんだよ、俺！』

炎は喚き声をあげるが、車椅子に乗った身体はいつものように静かに座ったままだ。ぴくりとも動かない。

むんはなんとかしようとして頭を目まぐるしく回転させた。

「隊長代理さん」むんは真崎に顔を向けた。「この子が言うたように、あなたは本当にリアルなの？」

「ああ、そうだ」

真崎はあっさりと認めた。

「だったら助けてあげて。事情なんてどうでもいいからこのお母さんを救ってあげて」

「そんな気はさらさらない」真崎は冷たく言い放った。

「どうせここにいる全員は死ぬ運命だからな」

「なぜだ」シュウが銃を向けたまま問いかけた。「なぜリアルであることを隠していた？」

真崎は呆然としている隊員たちをひと渡り眺めると、また視線をシュウに戻して、

「話してやろう。理由は簡単だ。リアルキラーズの一員がリアルだなんてことがバレたらどうなると思う？ 除名どころか、消されるのがオチだろう。」

俺はあの日、つまりこのヴァーチャル世界が誕生した日の朝、自分がリアルであることを知った。確率から考

えて、まさか自分がそうなるとは想像もしていなかったが、そのまさかが起こった時には正直、動転した」

「それはそうでしょう」シュウが相づちを打つ。

「俺は考えた。この裏返った世界でどう行動すべきかね。その結果、リアルキラーズに残ることを決心した。

残れば組織としての人脈、あらゆる装備、あらゆるネットワークを駆使することが出来る。俺以外のリアルを発見することも容易だろう。俺がリアルであることを活かせる場面があるかも知れない。そう判断したのだ。さらに加えて、この身の保証を得るために隊長を罷免した。

俺がトップに立てば、ヴァーチャルのフリが困難な仕事は全て部下に命じられるからな」

「そんなことのために隊長を……」

シュウは割り切れない思いを抱きつつ、さらに問う。

「しかしリアルがヴァーチャルになりきるなんてことが、そう簡単に——」

「無理だと思うだろう。それが当然だ。だが俺には持つて生まれた特技があった。まあ特技とっていいだろう。俺は両利きだったんだ。右でも左でも同じことができた。もちろん文字を書く面でもだ。左手では鏡文字さえ書くことができた。スゴくないか？ ハハハ」

「俺はまだ信じられない——。だいいちその顔だ」

「これか」

真崎は自分の顔に手を触れた。左目の上を額から頬にかけて走っている裂傷。彼の戦歴を表すとともに、相手に凄みを与えるための道具でもある。

シュウは遠い目をして続ける。

「俺はアンタが戦場でその傷を負った時、そばにいた。もう十年も前のことだ。だから傷がヴァーチャル世界誕生以前からそこにあることを知っている。もしもアンタがリアルなら、俺から見て傷はその目を境に反対に、右目を覆う場所にできたはずだ。これはどう説明する？」

真崎は含み笑いをしながら、それが一番の問題だったんだよとつぶやき、突然カツと目を見開いた。

シュウもむんも気圧けおされたようにその顔を見つめていると、やがて不可解なことが起こった。目の上に走る傷がムクムクと動き出したではないか。

「——！」

むんは驚愕とともに吐き気に襲われた。

傷口の微動は全体が波打つほどになると、ゆっくりと移動を始めた。左目の上からはずれ、小鼻をよぎり、とうとう顔の中央に達した。

眉間から鼻筋を通り、唇の真ん中を横断している傷。

それでも動きは止まらない。まるで時間を短縮して、地殻の動きを観察しているような気分をシュウやむんに与えた。

傷はいつしか右目の端に差しかかった。真崎はムツと顔に力を込めた。移動スピードはさらに拍車がかかり、裂傷はついに右目の上にたどり着いて止まった。

「ふう」大きく息を吐きながら真崎はにこやかに両手を広げた。「これが俺の新しい特技さ」

「……そんな……何なんだ、それは？」

『リアルパワーだ』黙っていた炎少年が叫んだ。『空気を自在に操るのと同じ理屈で、そいつは自分の肉体を操るコツを身につけたんだ！』

真崎はすべすべになった左頬をさすりながら鷹揚に頷いた。

「その小賢しいガキの言うとおりで。俺は身体を自在に変化させることができる。なんならもつとスゴいを見せてやろうか？」

真崎は両腕を上げかけたが、むんが「待って！」と手の平を向けた。まだ訊いておくことがある。

「あなたもリアルでしょう？ どうして他のリアルを殺そうとすんのよ」

すると真崎は苛立たしげに、

「知れたことだ。俺がリアルになろうがヴァーチャルのままだろうが、俺自身の目的は変わらない。『真佐吉の野望を粉碎する』、これだけだ！」

「……………」

「そういうことなんだよ。リアルが真佐吉の野望にとって必要欠くべからざるものならば、ヤツの手中に収まる前に殺せばいい。これまではリアルキラーズであることを利用するためにじつと我慢していたが、ここまですればもう必要はない。時間も切迫している。だから地上の部隊から五十嵐が現れたという連絡を受けた時、確実に仕留めてやろうと出張っていったのだ！」

「そのためには、仲間を圧死させてもいいと？」

「小を捨てて大に就く、だ。明日の正午になれば、米軍が最終攻撃をかけてくるんだぞ。手段を選んでいる場合か！」

言い放つと同時に、真崎の身体はむくむくと膨らみ始めた。迷彩服のボタンやファスナーが弾け飛ぶ。身体はますます膨らみ続け、スノーマンかゴーストバスターズのお化けのように巨大化していく。

（こ、これがシロヘビの正体——）

むんは逃げることも忘れ、原型をなくした真崎を見上げていた。

着ていた迷彩服はパンパンに張った身体によって破り裂かれた。そうか、それで別の人の服を借りないといけ

なかつたのかと、むんは納得した。そして今この状況が自分たちにとって悪い方向に膨らんでいることに気づいた途端、むんはシュウの腕をつかんで叫んだ。

「撃つて！ 早く！」

シュウは夢から醒めたように銃を構え直した。それでも引き金を引く決心がつかないらしく、銃口を下げると、

「真崎さん！」

と叫ばずにはいられなかった。

「ひゅー（シュウ）」白いアドバルーンが口を開いた。

その口の位置さえどこだか判然としない。「ひやまをふるな（邪魔をするな）。ふすはらひあうをふへ（撃つならリアルを撃て）。はおはいほ（さもないと）……」

言葉はゴボゴボという泡立つ音に掻き消され、それが合図になったように、真崎の腕だった部分が角のように左右に伸びた。

見た目はやわらかそうな二本の腕は、まるでタコの足のようにしなると、ふいに倍の長さに伸び、むんたちのほうへと襲いかかってきた。

ズンツ。床が腕の形にめり込んだ。こんなもので殴られてはひとたまりもない。

「みんな、逃げなさい！」

むんが喉が振り絞って叫ぶと、若者たちはいつせいに階段に取りついた。しかし真崎のタコ腕は容赦なく伸び、

昇り階段に先回りするようにへばりつくくと、逃げ道を断った。

シユウは雑念を捨てるように雄叫びを上げると、階段でうねうねと動く太く白い物体を撃った。しかし銃弾は鈍い音を立ててめり込むと、すぐにはじき返され、階段の上に転がり落ちた。

「くそっ、効かないのか！」

シユウが連れてきた隊員たちもマシンガンを撃ち込んだ。それでも銃弾はことごとく受け止められ、パチンコ玉のように階段に散らばった。

ぬおーっと化け物は吠えた。もはや手足の区別はつかなかった。髪の毛は埋没し、首だった位置も判らない。ただ目や口だけがそれらしきくぼみを作っているに過ぎない。

化け物はのしかかるような威圧感で進撃を開始した。進む先には炎少年がいた。化け物のターゲットはあくまでリアルなのだ。

むんは車椅子の後ろに回ると、引き動かすべく力を込めた。だが車輪はロックされたようにがたがたと揺れるばかりだ。

『やめろっ、俺は逃げない！』

むんの目は彼の足許に倒れている母親を捉えた。

「君は——」

言いかけた時、視界に影が差した。壁のように伸び上がった化け物が、天井の明かりを遮ったのだ。次の瞬間、化け物は炎とむんの上に覆い被さってきた。

明かりが消えた。何も見えない。  
すぐに呼吸も苦しくなってきた。

（そうか、狙いは窒息死か！）

のしかかった化け物の身体はなま温かく、そして布団のようにやわからい。むんがいくら両手で持ち上げても、隙間を見つけてスライムのように入り込んでくる。そればかりか、むんの全身に密着し始め、もがけばもがくほど身動きができなくなっていく。隣りの炎も何か叫んでいるが、やはり動けずにいる。

（なぜこんな芸当ができる？ 細胞を拡大してるんか、それとも増殖させられるのか。ああ、ホンマに息がでけへんようになってきた）

圧迫された肋骨が軋み、苦痛に顔が歪む。

まさにあと一押しでぺしゃんこにされる――。

そう思った時、突然に怪物の身体が波打った。

床との隙間に明かりが射し、空気がすうっと入ってきた。と、化け物はむんの身体を放り出した。

床に転がったむんは、何が起きたのか判らないまま、必死になってしぼんだ肺に酸素を送り込んだ。

むんの髪をいきなり熱風があおった。

見上げた目に飛び込んできたのは、少年の名前ではない、本物の炎だった。燃えている。なんと化け物の身体が燃えていたのだ。

むおー、むおーという耳を覆いたくなるような化け物の咆哮が<sup>こだま</sup>響する。白い巨体から立ちのぼる火は化け物が動けば動くほど勢いを増していく。白い皮膚が焦茶色に変わっていく。どうやら化け物の弱点は、この火だったらしい。

形勢は逆転した。しかし喜んではいられない。激しくのたうつ化け物の身体は、壁や天井にぶつかるたびに床に亀裂を走らせ、液晶パネルを砕く。

さらに逃げ惑う人々の上に長いタコ腕が落ちようとした時、鞭のように伸びた火線がタコ腕に巻き付いた。

「伊里江さん！」

むんは階段の踊り場に伊里江の姿を見つけた。片手を左右に振り回し、縦横無尽に火の鞭を操っている。もう一方の手に握られているのは百円ライターらしい。誰かに借りたのだろうか、それだけでこの強力な化け物に対抗できるとは――。

「ヤルヤんっ」

真崎だった化け物はたまらずフロアの奥へと逃げ出した。燃え盛る炎はほぼ全身を包んでいた。

身体が壁をこする音とも断末魔の悲鳴ともとれる騒音

をたてながら、怪物は奥へ奥へと広い廊下を逃げていった。

伊里江は力尽きたように踊り場に倒れた。優れぬ体調で無茶をしたのだ。むんは駆け寄ろうと階段の手すりをつかんだが、

『おふくろ——』  
という炎少年が聞こえた。

むんは二段飛ばしで階段を駆け上がると、ぜいぜいと呼吸を弾ませている伊里江の腕をとった。

「……むんさん……私は役に立ちましたか？」  
「もうちよつとだけ役に立って！」

伊里江を無理矢理背中に担ぎ上げ、むんはよろけながら階段を降りた。あちこちにパネルの破片や砂などが散乱しているのでひどく歩きにくい。それでもどうにかフロアに到着すると伊里江を乱暴に滑り落とし、

「お願い、お母さんを助けてあげて。リアルパワーで」  
母親は虫の息だったが、まだ生きていた。伊里江は青ざめた顔を彼女の撃たれた胸に近づけたが、

「……無理です。軽い外傷なら別ですが、これは——」  
「——！」

むんは少年の顔を仰ぎ見た。サングラスの奥の目は閉じたまま、口はいつものように半開きで、彼の心の動きを何ら伝えてはいない。

「……ほ……」

「えっ、何ですか？」

むんは母親の頭を膝に乗せ、口許に耳を近づけた。フロアの隅で伏せていた雛田がその様子を見て「みんな、シート！」と、いる者全員に静粛にするよう促した。

「……………」

(聴こえへん)

むんは目を閉じて、がっくりとうなだれた。

しかし炎少年の高感度マイクは、そんな母親の最後の言葉をしっかりと聴き取っていた。

「炎。元の世界に戻って、向こうのわたしを安心させてあげてね」

「お……」

むんはハツとした。顔を上げると、炎少年の唇が開いていた。いま何か言おうとしたのではないか？

トンッ。アームレストに置かれた指先がわずかに音を立てた。動いたのか？

むんは母親の顔を見た。母親の瞳が輝いたように思われたが、すぐに光は失われ、静かに暗黒の帳とほりが下りた。

萌黄は両腕を裏返したり表にしたりと細かく点検した。

それでも傷跡は全く見つけれなかった。

携帯電話を取り出し、時刻を確認する。忌まわしいあの二セモノ秘密基地を脱出して、まだ一時間しか経っていない。

「傷が癒えるのが速いのはうれしいけど、古傷は消えてくれへんねんなあ」

幼い頃に扉に挟んでできた、例の傷跡である。指先で傷の上をこすってみたが、何の変化もしなかった。

《だからって怪我しても大丈夫なんて、安心しちゃいけないよ》携帯電話からギドラが顔を出した。《携帯は壊したらそれまでだからね》

「ハイハイ、トラブルはなるべく避けろといいたいでしょ？」

萌黄は軽く受け流し、

（素直に観念して、元の世界に送り返してくれたらええねん）

心の中で真佐吉相手につぶやいた。

萌黄はあれから何度か階段に行き当たり、降りられるだけ降りた。一気に最下階まで行ってしまいたいのだが、時たま現れる『←エンジェルフォル』の表示に誘われるまま、右に左にと迷路のような廊下を進んで来たのだ。

他には一切の表札や地図のない地下深くで、たったひとつの行き先案内板。真佐吉が萌黄をそこへ連れて行き

たがっているのは明白だ。

ただ、そこに何かあるのかについては、説明は一切ない。『エンジェルフォール』という名前から想像するしかない。

（唯一、わたしの知ってるエンジェルフォールは……）  
気がつくのと、廊下の端にたどり着いていた。目の前には大きな両開きの扉。ニセ実家のところにあつたの似た鋼鉄製の扉だ。

「また何か用意してるんかな」

もう何を見ても驚くまいと心に決めていた萌黄は、開けようとした手の平を止めた。そして一步後ろに退き、ごくりと唾を飲み込んでから、扉全体を眺め渡した。

乱暴に塗りたくられた赤茶色のペンキ。厚みのある大きくて丸っこい把手。それは萌黄の記憶を呼び覚ますのに十分だった。

かつて猛獣のように牙を剥いて萌黄の手に噛みついた体育館の扉。それにそっくりだったのだ。

萌黄は驚いたが、それ以上に驚いたのは自分の中の心臓の鼓動が、まるで三倍速になったようなリズムでどくどくと打ち出したことだった。心以上に身体のほうがトラウマを記憶していたのだ。

「落ち着け、落ち着け」言い聞かせながら胸の上を両手で押さえる。「これも単なる意地悪な仕掛けだ。わたし

の小さい頃の体験を調べて、治療してもらった病院のカルテデータにアクセスして、怪我をした学校の体育館の図面をどこから引っ張り出してきて……なんでそんな手間のかかる意地悪をすんのかなーっ！」  
動悸は治まってきたものの、代わりに怒りがふつふつと込み上げてくる。

「おかげで一生消えへん傷が……あれ？」

萌黄は右手の甲に目を奪われた。古傷がまるで霧の中のランプのように、黄色い光で鈍く明滅している。

(何が起きてるん?)

左手の指をそっと近づけてみる。古傷の上をそっと人差し指の腹で触れてみる。熱い。しかも静電気を帯びたようにピリリと刺す感触があり、妙に快感を感じる。

さらに力を込めてこすってみた。さつき懐かしみながらやったように。すると光が強くなり、温度も高くなつたようだ。それでもこすり続ける。

一分ほどが経過したろうか。光は徐々に弱まり、熱も冷めてきた。

「——あ？ ああ！ ああああ!!」

萌黄は信じられない思いで、手の甲を凝視した。

つい今しがたまでであった古傷が消えていた。光も熱もなくなつて、指で触れても、あつた場所を特定できなくなつた。

「これもリアルパワーなんか……もしかしてリアルが操れるのは、空気とかガスとか、そんなだけとちごたんか……」

傷のなくなった手はまるで自分の手ではないようだった。萌黄はその手で自分の顔を包み、

「ひよつとすると、リアルパワーで美容整形もできたりして……外科手術の不要な整形って宣伝したら、お客さんがワンサカやってきて、たちまちわたしは大金持ち……」

《アハハハハハ》ポケットの中でギドラが軽薄そうな笑い声を上げた。《面白いね、それ》

「冗談よ」

萌黄はジーンズの上から携帯を小突いた。

《でもさ、どうして急にそんなことができるようになったのかな》

携帯本体はポケットの中でも、立体映像は服の上に顔を覗かせることができる。ギドラの三本の首がポケットの上に生えたキノコのようにユラユラと揺れていた。

「気持ち悪いなあ。——でもこの扉のせいみたいやね。昔のことを強烈に思い出させてくれたもん」

言いながら萌黄は扉を見つめ直した。記憶が蘇ったときはゾツとしたが、こうして大人の感覚で向き合うと、イヤな想い出は消してしまうのではなく、仲良くなれば

いいじゃないかという気がする。それだけ年月が経ったのだし、あの怪我のおかげで、むんというかけがえのない親友を得られたからだ。

この扉はそんなことまで想定して用意されたのだろうか。

(まさか、ね)

萌黄はもう一度手の甲に目を落とし、傷のないことを確かめると、その手を前に出し、すつと扉を開いた。

八つの眼球が横一線に並んでいる。視線はどれも十メートル下に広がる機械都市に注がれている。

「あそこネ」

柳瀬の指先、ハシゴから真つ直ぐ進み、二つ目の角を右へ折れ、すぐまた次の角を左に折れた床面。そこに円形の蓋が見える。

「ハシゴ下を出発して、所要時間は三十秒くらいか」

久保田が言うと、

「いや、二十秒あれば十分ですよ」

揣摩が自説を主張する。

「でも」柳瀬が額の汗を拭いながら、「こんなに監視ロボットがうろついてたら、十秒ともたないんじゃないかしら」

四人はいよいよボイラーのように熱い機械室を抜ける

ため、最後のハシゴを降りようとしていた。

ここに至るまで、恐ろしく高い空間を、いくつものハシゴを降り、ようやくたどり着いたのだ。

しかし最後に難関が待っていた。広大な機械室は上から見る限りでは模型の街と見まごうほど煙突や各種熱処理システムが並んでいる。つまり機械と機械のあいだを入り組んだ通路が迷路のように走っている。データを調べた結果、最短距離で機械室を抜けるには、監視ロボットの目を盗んで、あのマンホールの穴をくぐらなければならぬ。

ロボットは異常音や侵入者を検知すると猛スピードでやってくるのだと宝井社長は言ったという。ふだんは決められたルートを移動しているだけなので、うまく隙を突くしかない。

「その決められたルートが判らないんだなあ」揣摩が最後の踊り場となった五メートル四方の鉄板の上にごろんと転がった。「うわっ、熱い！」

「シート」

久保田が口の前で指を立てる。

「行けます」ぼそりと和久井助手が言った。暑い中、同じ迷彩服を着ていても、彼女だけは暑さに強いらしく、さほど汗ばんでいない。「監視ロボットの行動パターンが読めました」

「さつすがーっ」

揣摩が小さく拍手したが、和久井は表情を変えず、

「合図とともにハシゴを滑り降りたら、二つ目の交差点まで走ってください。そこで三つ数えてから角を折れま  
す。そのまま進み、すぐの角を五つ数えてから左へ曲が  
ります。マンホールの蓋は中央立てに割れ目があつて両  
側に開くタイプです。開けて中に降りたら、すぐに閉じ  
てください」

「……………」

「てことは、ひとりずつ行くしかないのか」と揣摩。

「ワタシから行くワ」

柳瀬がハシゴに向かった。

「気をつけて」

久保田が真面目な声で言うと、柳瀬はくるりと振り返り、

「そうそう、監視ロボットは侵入者にどんな攻撃をしてくるの？」

揣摩がすぐ小型パソコンで調べた。

「五十万ボルトの電流だそうだ」

「まあコワイ」

笑いながら言うと、柳瀬は階段に手をかけた。

和久井が下を覗きながらタイミングを測る。

「——今です」

柳瀬は合図とともに、ハシゴを器用に滑り降りた。リアルキラース隊員として着用している手袋が役に立った。床に降りた彼は、足音を極力たてないように、摺り足の要領で、二つ目交差点の角まで走った。

「一、二、三、それっ」

ちようどその通りの反対側の端を、二階建てバスの形をした監視ロボットが出たところだ。柳瀬は忍者のように腰を沈めて、次の角へと向かう。

残った三人は、頭上から彼の動きを食い入るように見つめていた。ロボットに予期せぬ動きがあればすぐに教えてやらねばならない。

柳瀬が最後の角を曲がって、マンホールに取りついた。「あわてるなよ」

久保田が声を震わせながらつぶやくと、「大丈夫です。柳瀬の度胸のよさは業界随一ですから」蓋は軽々と開いた。万が一開かないときは、すぐ横の袋小路に身体を入れるよう和久井助手が言い添えていたが、その必要はなかった。

柳瀬は中に入ると、Vサインをしてみせ、内側から蓋を閉じた。

「それじゃ、次、行かせてもらいます」

あらかじめ決めておいた順番どおり、二番目に揣摩太郎がハシゴを降りていった。

彼は柳瀬以上にスムーズな足取りで二つの角を曲がると、全く問題なくマンホールを開け、中に吸い込まれていった。

三番目は――。

「俺が行かないとダメかな？」

和久井助手は頷いた。彼女が全体を眺めて、降りていくタイミングを測っている。彼女が先に行ってしまうと、久保田はお手上げなのだ。

「ロボットは二十通りのパターンで動いています。そのどれに当てはまるのか、私でなければ判断できません」  
きつぱりと言われて、久保田も先に降りることだけはしぶしぶ了解したが、

「マンホールのところで俺はあんたを待つ。それが可能なパターンを読んでくれ」

わずかな間があつて、和久井はこくりと頷いた。

熱気がひっきりなしに噴き上げてくる。すでにふたりの顔は真っ赤だった。あまり長居はしたくない場所である。和久井も久保田も熱に浮かされそうになりながら、必死にロボットの動きを目で追った。

「――行けそうです。準備してください」

久保田はハシゴをつかんだ。それからまた十分ほどが過ぎた。

「もうすぐです。——あと五、四、三、二、一、ハイ」  
ツーツと久保田の巨体が滑り降りた。手袋が摩擦熱で煙を上げる。どすんと着地するや、脇目もふらずに駆け出した。ひとつ目の角へとひたすら突進する。

ところが勢いが付きすぎたようだ。角の手前で止まるのを、一、二歩行き過ぎてしまったのだ。

あわてて身体を引いたが、視界の隅に、横野通りの角を曲がりかけた監視ロボットがぎこちなく停止するのが見えた。

(しまった、どうする?)

久保田は和久井を見上げた。彼女も事態に気づいたらしい。忙しく目を動かしている。

合図があった。ひとつ手前の交差点に戻れと言っている。久保田はすぐに踵かかとを返し、さつき通過した交差点を左に折れた。その通りにロボットはいない。

和久井は指を四つ折って示している。久保田は手を挙げ、四つ目の角へと急いだ。

(あわてるな、あわてるな)

そのまま次の交差点へと進む。角からそつと顔を出すと、彼に気づいたロボットが向こうの角を折れようとしているところだった。

和久井はゴーサインを出した。久保田は騒々しい音を放っている機械の角を折れ、そのまま突進した。

「あつた！」

右にマンホールが見えた。久保田は急いで蓋に取りつくくと、両手で頭の上に丸サインを作った。

すると和久井は間髪入れずにハシゴに取りつき、すつと機械の陰に入って見えなくなった。

久保田は蓋を開けようと把手をつかんだが、  
(待てよ。俺のミスでロボットたちの動きが変わったりしないか?)

そう考えると、たちまち不安が広がった。和久井に危険が迫っても、誰も注意を促す者がいない。どうする？  
その時、遥か向こうの角を、久保田がいる通りに入つてこようとするロボットの姿があつた。久保田はとつさに判断し、非常時用の袋小路に身体を埋め込んだ。強烈な熱風が首筋に吹き付け、危うく悲鳴を上げそうになつた。

(和久井さん、無事にたどり着いてくれ)

久保田は腰に手を当てた。服を拝借した時にいっしょに奪った銃がある。扱える自信はなかったが、いざとなればぶつ放すしかない。ロボットを破壊すれば真佐吉に侵入が知られるだろう。だがそれも止むなしだ。

マンホールの上をロボットが通過していく。久保田は

袋小路の壁際に身体を押しつけた。背中を高熱がペロりと舐める。

「うぐぐつ」

ロボットは右の方向へと消えた。

「たはっ」壁を離れた久保田は、息を喘がせながら、したたる汗を二の腕で拭った。「俺は一生、サウナなんかには入らないぞ」

するとその時、彼の耳に「ひゃっ」という悲鳴が聞こえた。あわてて耳に手をかざす。悲鳴はそれっきりだったが、明らかに和久井助手の声だった。

「いかんっ」

久保田は袋小路を這い出し、左右にロボットがいないことを確認すると、腰の銃を抜き、ハシゴのある方角へと駆け出した。

ひとつ目の角を曲がる。

「うっ、あれは！」

ウソであってくれと心の中で叫んだ。

煙のたなびく交差点の角、その床に迷彩服が横たわっていた。

13

久保田は周囲に注意を払うのも忘れ、煤ぼこりを蹴立

てて交差点に突進した。左右に走る通路の左角から上半身が俯せうつぶせになつてはみ出している。不安が喉の奥から込み上げてきた。まさか——！

しかし近づくに連れ、不安は一時棚上げされた。そこにあつたのは上着のジャケットだけだったのだ。

ふいに予告もなく、右側から監視ロボットが現れた。

久保田は「しまったっ」と両足に急ブレーキをかけた。

その時、タイミングよく左の機械が、勢いよく黒煙を久保田の前に吐き出した。彼は左の煙突と煙突のあいだに狭い通路があるのに気づくと、躊躇せずその中に飛び込んだ。

熱気が左右から押し寄せる。必死で我慢しつつ、通路に顔を出すと、幸いロボットは久保田に気づかなかつたようで、ボディの両側から伸びた多関節アームが和久井のジャケットをつまみ上げようとしていた。

(和久井さんはやられたのか？　しかしこんな短時間で砂状化はすまい)

目だけを出して、ロボットの様子をうかがう。ジャケットは砂にまみれてはいなかった。

(上着を脱いで逃げたんだ。しかしどこへ?)

街並のように並ぶ機械の高さは一メートルから二メートル。長身の久保田でも背伸びしたくらいでは見通すことはできない。

「ええい、ごちゃごちゃ考えとれん」

久保田は目の前の機械に足を掛けて昇ると、爪先で伸び上がって街並の上を見渡した。目に煤が吹き付け、涙がイヤというほどこぼれ落ちる。それでも我慢して、入り組んだ通路に何か見えないかと目を凝らしていると、

(いたっ！)

黒髪が揺れながら右から左へと駆けていく。久保田のいるところからは一筋ハシゴ側の通路だ。

急いで機械を降りた。もう一度通路の左右を確認すると、最初のロボットはいなかった。ジャケットも放り出したままだ。生き物以外には興味がないらしい。

久保田はいまその目で見た和久井の逃走ルートを、記憶の中の街並に俯瞰図に当てはめた。

「こつちか」

見当をつけて右側にダッシュすると、すぐに右へ折れる細い通路が見つかった。巨体を斜はすにして飛び込む。汚れたダクトが行く手を邪魔する。久保田は敏捷な動きでそれらをかいくぐり、目星をつけた通路へと出た。

「和久井さん！」

後ろ姿が見えた。彼女は振り返ると、真っ黒になった顔の上の目を丸くして久保田を見つめ、つんのめるように駆け戻ってきた。

久保田の胸にしがみつく。両肩を抱えると小刻みに震

えていた。

「無事でよかった。さあ、急ぎましょう」

「ハイ——こっちはです」

和久井と久保田は手を取り合って、もと来た道を引き返した。和久井の足取りにためらいはない。

「次の角を左へ、すぐ右、そして二つ目を左です」

すでに逃走ルートを設定している。久保田は舌を巻いて、彼女の背中を追いかけた。

和久井はそれでも慎重だった。角の手前で目だけ覗かせ、ロボットがいないことを確認して先に進んだ。

左へ、そして右へ。

最後に左に曲がる角に差しかけると、彼女は久保田に耳打ちした。

「ここを突き当たりまで行けば……すぐ左がマンホールです」

「オツケー、もうひとふんばりだ！」

「ハイッ、がんばりましょう」

息も絶え絶えながら、互いに声を掛け合う。ふたりとも体力の消耗が著しかったが、これがラストランだと気持ちいを奮い立て、上がらない膝をどうにかだましました。前へ送り出した。

ところが、最後の直線コースを半分まで来た時である。右側の何かの装置の一部が突然目覚めたように通路に出

てきたのだ。

久保田は目を見張って、足を止めた。

それは監視ロボットだった。装置に張りついていたら見えなかったのだ。わざと身をやつしていたのか、スリープモードだったのは判らないが、いずれにせよふたりの接近に反応して動き出したのだ。

ガーツと駆動音をあげながらこちらに近づいてくる。畳んでいたアームが伸びて、その先端が火花を発した。五十万ボルトだ。

「よおし、こうなったら力づくの勝負だ」

久保田が指を鳴らしながら前に一步出ると、和久井は袖をつかんで止めようとした。

「待ってください。陽平さんが倒れたら、わたしには運べません」

「よ、ようへいさん？」

久保田を下の名前で呼んだ和久井は、抱きつくような格好で彼を装置と装置の隙間に押し倒した。

「隙を見てマンホールに。わたしは後から行きます」

「あんだ、何を——」

「いいですね。言ったとおりにしてくださいよ」

和久井は振り返らずに監視ロボットに向かっていった。「和久井さん！」

彼女はロボットの手前で路地を右に折れた。ロボット

はそのあとを追う。

久保田は迷った。自分だけが逃げるなんて。

路地を覗くと、懸命に駆けていく和久井の後ろ姿がロボットの向こうに見えた。

(やっぱり逃げるわけにはいかない)

ただ、和久井の思惑が判らないので、追いかけたいところをぐっと我慢して、その場に足を止めた。

和久井は路地の先、向こう側の通りに出ると、くるりと向きを変え、すぐ脇の装置に手をかけて昇り始めた。

(そんなことをしたって、逃げ切れるもんじゃ——)

すると、向かいの通路から別のロボットが侵入してきた。これでは挟み撃ちではないか、状況が悪くなるばかりだ！

久保田の足が地面を離れようとした時、二台目の監視ロボットに躍りかかるように、和久井の身体が設備の上から落ちてきた。和久井の上半身は——下着姿だった。

久保田は目を丸くして、上げた足を地面に降ろした。

和久井はジャケットの下に着用していた、これも迷彩色のシャツを飛び降りざまに、ロボットの上に被せたのだ。

驚いたのはロボットも同様だったらしい。突然、動きが乱れ、迫りつつあった一台目のロボットの進路を妨害した。すると一台目のロボットはアームを伸ばし、二台

目にスタンガン攻撃をかけたではないか。それも和久井のシャツの辺りに向けて。

二台目もやられっぱなしではなかった。視界がおそろく見えないこのロボットは、手探りでやはりスタンガン攻撃を仕掛ける。周囲が激しい騒音の中で、二台のロボットの戦いが始まった。

(なんてこった。シャツだけで和久井さんだと勘違いしてやがる)

気がつくと彼女の姿は路地から消えていた。いち早くロボットのそばを脱出したのだ。迂回してマンホールに行くつもりなのだ。

久保田も二台のロボットから目を引き離し、マンホールへと急いだ。すると右から当の和久井助手も駆けてきた。彼女は久保田に気づくと、両手を胸の前で交差させた。

「見ないでください！」

言われても久保田の目はそらすことができずにいた。ずっと白衣の下に隠れていた和久井の身体は、意外なほどヴォリュームがあることを見せつけられたからだ。

「は、その、すみません」

久保田はマンホールの上に到着すると、まず先に自分のジャケットを脱いで和久井の肩に被せた。そしてマンホールの把手を握ると手前にぐいと引く。

久保田は和久井を先に降ろし、次いで自分も蓋の内側の把手を握りながら、穴の中に身体を沈めた。

最後に久保田が見たのは、怒りもあらわにスタンガンを放電させながら全速力で走ってくる監視ロボットの姿だった。

「あばよ」

マンホールの蓋はぴったりと閉じられた。

「よくご無事で」

柳瀬が久保田の手を取りながら涙を流した。情に厚い正義の戦士としては、なかなか降りてこないふたりを助けにいくべきだと主張していたが、揣摩に「もう少し待て」と止められ続けていたという。そんな揣摩も明らかに安堵の表情を浮かべていた。

「ここは？」

久保田が訊ねた。白い壁の小さな部屋だった。それでも天井には何本ものダクトが走っていて、中を液体だか気体だかが流れているようだ。

それでも上の空間と比べれば、天地のさほど快適な室温だった。久保田はようやくひと心地つける気がした。せめて一時間でもゆっくり眠りたい。

「単なるバッファゾーンのようにです。あっちの通路を通れば」と揣摩は部屋の隅を指さす。「階下へと降りられ

る階段があります。もうムチャはせずにすむでしょう」  
「そう願いたいな」

久保田は和久井を見た。壁にもたれてぐったりとしている。

「お疲れさま、いや、ありがとう」久保田は礼を言った。  
「あんたに助けられましたよ」

和久井はいいえと小さく言った。久保田のLLサイズのジャケットを着た彼女は非常に小さく見えた。

久保田は彼女の横に腰をおろすと、

「よくあんな戦法をやるうと思いつきましたね。まるで敵の弱点を知り尽くしているようだった」

すると和久井は少し微笑み、

「あのロボットはウチの——エネ研が開発に協力した機種なのです。だからどんな習性か、どこに目があるのか、知ってました……。生物としての痕跡は残さなかったから、我々のことは、真佐吉には報告されなんでしょう」  
ホウと言つて、久保田は唇をすぼめた。

「でも——怖かった」

和久井は久保田の肩に頭を持たせかけた。久保田は彼女の肩に手を回した。

「ちよつと先の様子を見てきます」

揣摩と柳瀬は気を利かすと、そう言い残して通路のほうに出かけていった。

萌黄は（ここや）と思った。

直感が、こここそWIBAの最奥部、そして自分が目指すべきゴールだと確信した。

開いた扉の向こうには、これまでに通ってきた中で、最も広い空間が待ち受けていた。

広さは阪神甲子園球場と同じくらいいか。中央には正十二角形のアリーナがあり、頂点同士を結ぶ直線がカラフルで鮮やかな幾何学模様を描いている。

萌黄は着ている白無地のTシャツを指で伸ばしてみた。WIBAに渡る前、近江八幡の打ち捨てられたコンビニで手に入れたものだ。あちこちに破れが目立ち、ほつれ、全体に黒ずんでいる。はきっぱなしのジーンズも靴と同様よれよれだ。

でも一番のよれよれは萌黄自身かも知れない。途中で見つけたトイレで鏡を見ると、無惨なほど髪はぼさぼさ、肌はざらざらだった。リアルパワーを一気に吐き出してしまったせいで、充電中の今、身体の回復にまわす余力はないようである。

それだけにこの空間の美しさを前にして、のこのこ前に出ていくのがためらわれた。

アリーナの周囲は低い壁で囲われ、その外側にはぐりりと階段のような観客席がめぐらせてある。先に連れ込まれた円形劇場の大型版だ。萌黄はその中腹にいた。

アリーナに目を戻す。凝らした目が、正十二角形の中に置かれた黒く丸い構造物を捉えた。構造物には、木になった林檎のように、透明で丸いものがいくつもぶらさがっている。

「——！」

萌黄は自分の確信が正しかったことを知った。

その球体こそ、真佐吉がリアルを封じ込めるために使ったカプセルだったからだ。

萌黄は階段を駆け下りると、アリーナ外周の壁に身を乗り出した。下を覗くとアリーナまでは数メートル。どこかに階段はないかと探しかけて、

(アホやな、わたし。飛んだらええやん)

ひとり頷くと、すぐさま手すりを蹴ってジャンプし、ふんわりと幾何学模様の上に着地した。

周囲に人影はない。聞こえてくるのは空調の音くらいで、物音ひとつしない。

(でも真佐吉さんはどっかで見てる)

萌黄は油断なく目を動かし耳をすませながら、ゆっくりと黒い構造物に歩を進めた。一気に距離を詰めて、畏でもあったら困るといのように。

靴の裏がやわらかな感触を伝える。アリーナに敷かれているのは人工芝だ。するとここはやはり球場なのだろうか？

構造物が目の前に迫った。

萌黄は、嗚呼あとため息をついた。

清香がいた。齋藤もいる。ふたりとも透明な楕円体の中で、背中を見せて横たわっている。他にも十個の透明カプセルが吊るされているが、どれも空だった。

「清香さん！ 齋藤さん！」

萌黄は両手を口にあてて呼んでみた。しかしどちらもピクリとも動かない。例の催眠ガスが効いているのだ。しかし同じく捕まっていた柵はどうしたのだろうか。

黒い構造物は正二十面体をしていた。カプセルは構造物の十二個の頂点に組み込まれている。カプセルを中心から等距離に配置するためだ。黒い骨組みは複雑に絡み合いながら、中心部へと収束している。そこにはひと抱えほどの漆黒の球体があった。黒い骨組みがウニのイガのように突き立っている。骨組みを逆に追いかけていくとカプセルに行き当たる。骨組み自体は存外に細い。鉄骨ではなくFRP製かも知れない。

「真佐吉さん！」

萌黄は腹に力を入れて、敵の名を呼んだ。

「お望みどおり、やってきてあげましたよ。あなたもそ

ろそろ実物の姿を見せたらどうですか？」

萌黄の声は反響もせず、広い空中に吸い込まれていった。

焦りも憤りも抑え込んで、萌黄はじっと待った。

一分。二分。依然反応なし。

萌黄は全身を耳にしたまま、ゆっくりと構造物の周囲を巡ってみた。カプセルの数の十二は、この世界に送り込まれたリアルの数。すでに半分近くが命を落としている――。

「ん？」

空中で何かが光った。萌黄は足を止め、目を細めながら後ろ向きに下がった。

蜘蛛の糸のような細く透明な線だ。それが一方は構造物の間を縫って黒い球体に繋がっている。もう一方は――たどっていくと、どうやらほぼ鉛直状の丸い天井まで伸びているらしい。

萌黄は人工芝に顔をくっつけてみた。

（床に接してない。ミラーボールみたいに天井から吊り下がってる……）

カタンと遠くで音がした。萌黄は強張った顔を上げた。扉が開いている。萌黄が入ってきたのとは真向かいの場所だ。人影が差した。

「待たせたね」

朗々とした男の声だった。

「真佐吉さん」

人影は小さかったが、和歌山で伊里江真佐夫に送られてきた画像に瓜ふたつの人物であることはすぐに判った。「ようやく会えたね」

真佐吉は悠々たる足運びで階段を一段一段降りてくる。声はマイクを通じてスピーカーで拡声されている。

客席の最前列まで来た時、真佐吉は腰を屈めた。そして両腕を天井に向けて伸び上がると、すーっと身体が宙に浮かび、そのまま緩やかな弧を描いてアリーナの上に着地した。

こちらに近づいてくる。ジージャンもサングラスも、そして風になびいたような長髪も写真のままである。

(いよいよ、ホンモノ……?)

15

真佐吉はまるで公園を散歩でもしているような、そんなくつろいだ歩きかたをしている。左手を腰にあて、右手は波打つ髪をしきりにかき上げながら。そして瘦けた頬を横に広げて人を食ったような笑みを浮かべながら。

萌黄の中で、緊張が極限にまで高まった。

相手は、人類史上最大にして最低の科学者。

場所は、宇宙の爆心地となるかもしれないWIBA最  
深部の巨大競技場。

時は、鏡像宇宙、つまりはヴァーチャル世界の誕生か  
ら十二日目。残された時間は、あと二日。

偶然とは恐ろしい。自分みたいな平凡で取り柄もない  
人間が、こんなとてつもない状況に置かれるなんて。

どつしりと背中に重たい荷物を背負わされた気分だっ  
た。自ら志願したわけでもないのに。

一体自分なんかは何ができるというのか？

何もできはしない。おそらく。ここまで自分を誘い込  
んだのも、真佐吉の悪戯心のなせる技だろう。御しやす  
い女の子。それが自分だ。よく知ってる。

この世界では萌黄は超人だが、相手だってリアルだ。  
自分のリアルパワーが通じるとは到底思えない。

ならば、せめて文句のひとつやふたつ、いや十も百も  
叩きつけてやろう。関西弁でぶちまけてやろう。それで  
真佐吉の気持ち揺らぐなんてことは万にひとつもない  
だろうが、やるしかない。できることはそれくらいのも  
んだ。

「萌黄さん。私が伊里江真佐吉だ。どうかね、私のリア  
ルボールは？ なかなか美しいだろう」

真佐吉は生声で話せる距離になったところで足を止め  
た。一応は萌黄に対する警戒心があるのか。

〈リアルボール〉とは黒い構造物のことらしい。萌黄は質問を無視した。

「あなたがホンモノである証拠は？」

「君にはどう映るね？」

「……………」

真佐吉は自信ありげに腕を組むと、再び萌黄に向かって足を踏み出した。

その足がブレた。萌黄は疲れ目かと思い、目をこすりかけたが、その手を止めた。ブレがどんどん広がっていく。と見る間に真佐吉が三人に増えていた。どれも同じ格好、同じ足取りで迫ってくる。

「ちよい待ち！ 立体映像なん!？」

三体の真佐吉はニヤニヤするばかりで答えようとせず、なおも接近してくる。どの真佐吉も人工芝に影を落としている。芝を踏む音さえもつともらしく聞こえる。

萌黄はあわてて両手を腰に構え、勢いをつけて前に差し出した。彼女の左右につむじ風が起こり、真佐吉に対して吹きつけた。

枯渴したリアルパワーでは、風の勢いは強くなかったが、煽られた真佐吉たちは「わあっ」と声を発して芝の上に転倒した。その様子がいかにもわざとらしくかったので、萌黄には三人の中に実体がいるのか、三人とも立体映像なのかは判別できなかった。

「ひどいな」「まいったね」「いきなりご挨拶じゃないか」

てんでバラバラに立ち上がる真佐吉。その姿はまた分身して、都合六体に増えていた。

相手をしていても無駄！

萌黄はリアルボールに向き直ると、骨組みを握り、足を引っ掛けて赤道あたりの位置に取りついた。

「それ以上こっちに來たら、これを壊すよ！」

真佐吉たちは一斉に立ち止まった。互いに顔を見合わせている。すると、ひとりが隣りの真佐吉に覆い被さった。ふたりの真佐吉は合体すると、倍の背丈になった。

さらにもうひとりが被さり、また大きくなる。被さる。大きくなる。六体が合体を終えた時、巨大化した真佐吉の頭は遙か天井に達していた。

「萌黄さん、壊すなんて無理だよ」

まるで雷鳴のような声だった。萌黄は呆然と眺めるしかなかった。

(…：最初からホログラフィ映像やったんか)

真佐吉はぐいっと腰を折って、萌黄に顔を近づけた。「君には無理だ。まだリアルパワーはほとんど充電されてないじゃないか。リアルボールはそんな君に破壊できるほどヤワじゃないよ」

先ほどの風攻撃ですっかり見抜かれている。萌黄は唇

を噛んで骨組みを睨んだ。今の萌黄には、骨組み一本曲げるのも一苦労だろう。

「私が何のために、君を懐かしの部屋に案内したか、教えて上げようか？」

「……………」

「君にとっては思い出すのも切なくつらい場面が続いたはず。そして最後には追いつめられたあげく、リアルパワーを全開にして、まるまる1ブロックを破壊してくれた」

萌黄は厳しい表情を作って真佐吉に向けた。

「——そうか。パワーを搾り取って、すぐには使えないようにするためやったんやね」

「フッフ、それもある」

「それも？」

「君が発散したエネルギーは、丸ごと回収させてもらったよ。君はきれいに使い果たしたことで、爆発するまでの期限が延長されたと考えたかもしれないが、甘い甘い。ごらん、ここを」

真佐吉は大きな手を動かして、清香の向こう側にある透明のケースを指さした。中にボーリングの球のようなものが入っている。

「君のエネルギーだ。これが君の代わりに最低限の仕事をしてくれる」

真佐吉は胸を反らすと大声で笑い出した。その声が競技場にわんわんと反響した。

萌黄は全身から力が抜けていくのを感じた。あまりにも巨大な真佐吉の前に、虫けらのような自分。どうあがいても敵うはずはなかったのだ。

「——もうひとつ教えてあげよう。君をここまで導いた行先表示には何と書かれてあったかね？」

「……エンジェルフォール」

「そう、エンジェルフォールだ。君はこの名から何を想像したろうか？」

「……南米の滝」

もはや萌黄は問われるままに答える人形になっていた。真佐吉は満足そうに大きな首を頷かせた。

「南アメリカ大陸、ギアナ高地にある最大のテーブルマウンテンから流れ落ちる滝だね。落差は1キロ近くあるという。——実はここが、この場所が、WIBAのエンジェルフォールなんだよ」

「——？」

「見せてあげよう、これだ」

真佐吉の姿がブルツと乱れると、そのまま掻き消えた。代わりに競技場の袖から巨大スクリーンがせり出してきた。画面には、WIBAを横合いから見た図が表示されている。

続いて、ズズズという地響きが起こり、空気が振動した。萌黄は振り落とされまいと、骨組みを伝って、さらに上に昇った。

地鳴りのような音は一向に止まない。萌黄は両腕を骨組みに絡めて身体を安定させた。

「スクリーンをよく見ていたまえ！」

真佐吉の声が促す。言われて視線を上げた萌黄は、思わず目を瞠みはった。

W I B Aの図には喫水線が青く描かれている。今そのラインが少しずつ上昇し始めているのではないか。いや、W I B Aのほうが沈んでいるのだ！

「ど、どういうこと!？」

「ハハハ、地下一階と地下二階のベントを開いた。いま地上の階段口から、どんどん湖水が流入している」

「W I B Aが沈むやん！」

「まさか。これがエンジェルフォールを生むんだよ」

萌黄は理解できず、ひたすらスクリーンを見守った。

すると彼女の足許で、今までとは違う、もっと直に響いてくる振動音が聞こえてきた。

腕はそのまま顔だけを向けて覗き込むと、床が動いているのが判った。

「落ちるんじゃないよ」

競技場はW I B Aの〈底〉ではなかった。アリーナは

いま十二分割された三角形になつて外側へと引き込まれていく。そしてアリーナの下には、ぽっかりと空いた暗い穴が現れた。

アリーナの底が開き切ると同時に、穴の中に、上から順番に輪のようなライトが灯った。

萌黄は恐怖に凍りついた。自分を乗せたリアルボール、黒い正二十面体は、中空に浮いていたのだ。

(透明な線で吊るしていたのは、このためか！)

萌黄の目が、穴の側壁に無数に取り付けられた羽根車を捉えた。何だアレは？

「さあ画面を見ていたまえ」

スクリーンは分割画面となり、水の流れ込んだフロアの各所を映し出していた。真佐吉を探して潜り込んだ迷彩服たちが映っているものもある。

彼らは逃げ惑っていた。逃げる後ろから洪水のような水が押し寄せ、彼らを次々と飲み込んでいく。

「バカだね。ハハハ」

真佐吉は軽薄な笑い声を立てたが、萌黄は心臓をわしづかみにされた思いがした。むんや久保田らもこの中にいるかもしれないのだ。

「うろうろ……」

なす術すべがない。歯を食いしばって見ているしかない。

「さあ、いよいよエンジェルフォールの誕生だ」

その言葉を合図に、天井の一部が動き、ぐるりと円形に細い口が現れた。そして間を置くことなく、そこから大量の水が流れ込んできた。水は萌黄を乗せたリアルボールのそばを通過し、遙か下方に落ちていった。

驚くほど大きな流水音。萌黄は丸い滝の中にいた。

見おろすと滝の水が羽根車を勢いよく回している。

「気づいたかい？ エンジェルフォールとは水力発電所のことなのさ」今や真佐吉の舌鋒も得意の絶頂である。

「ここで生まれた莫大な電力が、リアルの起爆装置を動かしてくれるって寸法なんだよ。素晴らしいだろう。これは君が円形劇場で出会った数百人の男たち、彼らの労働力の賜物だ」

流れ落ちる水の中から声が聞こえた。押し流され、落下していく迷彩服たちの悲鳴だ。

(…：…ひどすぎるっ)

滝が発生させた霧が辺りに立ちこめてきた。萌黄は朦朧とする意識の中で、むんや久保田の名を呼んでいた。

「くそっ、なんだよ、この水はよお！」

柵ひょうりゃくは流れ込んできた湖水を逃れ、必死に廊下を駆け抜けていた。扉を開けては廊下へ、また開けては廊下へ。

彼はあの時、閉じようとしたカプセルから萌黄によって救われ、その後、半ば麻痺まひした身体で抜け出すと、探

索する男たちの手を逃れ、命からがらここまで逃げてきたのだ。

「どっかに階段かエレベーターはないのか！——ワッ」  
何かにつまずき、彼は激しく転倒した。

「痛つてえ——ン？ 何だコレ？」

柘は自分が蹴つまずいた物体を、目を丸くして見おろした。

彼が思わず、ナン（インドなどで食されるパン）を連想した。白くてむくむくとしたものが廊下の向こうから長々と横たわっていたのだ。あちこちに黒く焦げた痕あとがあり、そこからイヤな臭いを発していた。

「気持ち悪いな」

柘は足でぽんと蹴った。すると白い物体の先端がズズと動き、裸の男の上半身が現れた。

「——ま、真崎さんじゃないですか！ どうしてこんな格好で」

柘は駆け寄った。すると真崎は仰向けに倒れたまま、顔を横に向け、

「……………ひい……………らぎ……………この……………役立たずが……………」

「ナ、ナ二言うんですか。俺はアンタの言ったとおりに動きましたよ。ちゃんと最後のリアルは野宮助教教授だってデマも流したし——ちよつとした手違いはあったかも知れないけど」

あの夜、琵琶湖大橋のたもと、観覧車の前で柊が出会ったのは真佐吉ではなく、真佐吉に化けた真崎だったのだ。真崎はおのれがリアルであることを示し、柊が真佐吉に持ちかけるつもりだった話で柊と契約した。つまり、自分の言うままに動けば、真佐吉を倒した以後の世界は好きにして構わないと。

真崎の腕が柊の足首をつかんだ。柊は真崎の裸の背中を見て卒倒しそうになった。焼けただれた皮膚が再生しきれずにブヨブヨとうごめいていた。

柊は逃げようと後じさりしたが、真崎が放さず、廊下の上に滑るように倒れた。よく見ると彼が足を取られたのも、真崎の身体からはがれおちた白い皮膚だった。

驚くままに真崎に顔を戻した柊は、さらに恐怖に顔を引きつらせた。ナンのような物体は、真崎の下半身だったのだ。

「ひ、ひえ、放せ、放せよ！」

「……………許……………さん……………」

言葉が終わらぬうちに、焦げ目のない部分がタコ足のように伸び上がったかと思うと、柊の上に覆い被さった。

「ワツ、た、助けてくれーっ!!」

その悲鳴は誰の耳にも届かなかった。